美少女戦士セーラームーン　JIIYA！

丸焼きどらごん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

特定の夢を見続けながら、大事な何かを思い出せないまま日々を過ごす高校生、土御門景衛。そんな彼はある日前世の記憶を取り戻す。景衛の前世は、地球国王子エンディミオンに仕える宮廷魔術師の爺さんだったのだ！

これはエンディミオンことタキシード仮面こと地場衛に再び忠誠を誓い、陰ながら支えようと頑張る爺やの奮闘記である。

目次

1じいや，始まりの夢 ―――― 1
2じいや，同級生はタキシード～蘇る記憶 ―――― 12
3じいや，じいやとセーラー戦士 ―――― 26
4じいや，かつての弟子は今日の敵 ―――― 35
5じいや，今明かされる衝撃の真実！ ―――― 51
6じいや，背後のお留守は油断の証 ―――― 65
7じいや，希望を抱いてメイクアップを叫ぶのさ！ ―――― 78
8じいや，飛んで火に入る王子なりけり～そして始まるダルシムＶＳザンギエフ ―――― 90
9じいや，ヘリオドール（イエローベリル） ―――― 100
10じいや，暗黒の中へ飛び込んで ―――― 120
11じいや，月に代わってお仕置きよ！ ―――― 129
12じいや，戦いのその後で ―――― 143
13じいや（終），月が照らす青い碧いこの星で！ ―――― 153

1じいや・始まりの夢

夢を見る。録画したテープを繰り返し見るように、何度も何度も同じ夢を。

夢の中で俺は誰かを呼んでいた。夢の中で、俺は何かを止めようとしていた。しかしそれは叶わなかったようで夢の終わりにはいつも、どうしようもないほどの後悔に苛まれる。

――――――――――――――――――――■■■を止められたならば、救えたならば……。

■■■□■■■様も、■■■■□様も失わずに済んだのに。

夢に映像は無く、固有名詞も聞き取れない。ただ、激流のように強い感情が押し寄せてそれが酷く苦しくてならなかった。

俺は、いったい誰を守れなかったんだろう。

「うん、今日もいい日だ！」

今日もいい天気になりそうだと嬉しくなり思わずでかい独り言を呟けば、両親と妹から「朝から煩い」と苦言を頂戴してしまった。どうやら睡眠を妨げてしまったようだが、俺にしてみればみんな寝過ぎなのだ。起きたのなら惰眠を貪らずに早く起きればいいものを。

早起きは三文の得である。

早朝の空気は水気を含んでいて清々しく、いつも良い気分で一日を始められるのだから習慣にして損はない。だからみんな俺のように早起きしてこの幸福感を味わえばいいのにと常日頃から言っているのだが、それを言えば「あんたは早く起きすぎ」と呆れられた。……嘆かわしい事に、俺のおすすめに対し家族の評判はあまりよろしくないのだ。しかしそんなに早いだろうか？　まあ、母とて起きるのは六時付近だからな。それに比べたら四時起きがデフォルトな俺の朝は早いか。……でもあと三十分早起きすれ

ば、もっと心に余裕もできると思うんだがなぁ……。

そんなわけで、俺の朝は午前四時に目が覚める事から始まる。昔から見ている妙な夢のせいで深く眠れないからか、すっかりこの習慣が身についてしまった。もう少し寝ようと思っても、不思議と時間になれば目が覚めてしまうのだ。そのおかげで普段の行動もあいまってか妹からは度々「じじくさい」と言われる。失礼な。俺はまだピッチピチの男子高校生だぞ。

そして目が覚めたら顔を洗い、健康のために寒風摩擦をした後軽いジョギングで体を温め、冴えた頭で読書をするのが日課だ。読書している間に朝日が昇り始めるので、それを見ながら珈琲を飲むのが最高に幸せである。朝刊が届く時間には外に出て、新聞配達の中学生くらいの若者にねぎらいの言葉をかけてから直接新聞を受け取りそのまま一面からざっと目を通す。父も出勤前に新聞を読むから、先に読んで読む時間がかぶらないようにせねばという配慮だ。

そうこうしているうちに母が起きてきて朝食の準備を始めるので、その間に俺は洗濯機のスイッチを入れ前日の洗濯物を洗う。こうしておくと出かける前に干せるのだ。そして洗濯中及び朝食が出来るまでの間、学生らしく勉強に励む。

うむ、充実した朝だな。

朝食を食べていると、遅刻ぎりぎりの時間に起きてきた妹に「なんで起こしてくれなかったのー!?」と文句を言われた。起こしたぞ、五時くらいに。その時は「ウルセーじじい！　早いっつーの！」などと暴言を吐いてきたくせに我儘な事だ。

そんな我儘な妹だが、それでも妹は妹。可愛い奴だ。だから俺は心を鬼にしてこう告げる。

「じゃあ、俺は行くけど。しっかり朝ご飯は食べてくるんだぞ？　せっかく母さんが作ってくれたんだから」

「ちょ、ちょっと待ってよ！　お兄ちゃんまだ時間余裕でしょ!?　少しくらい待っててよ！　でもって自転車乗せてって！」

俺は心を鬼にする。

「嫌だ。寝坊するお前が悪い」

「ケチー！　お兄ちゃんのケチいいいいー!!　てゆーか、お兄ちゃんがあんな早い時間に起こさなきゃ二度寝してないもん、馬鹿ぁぁぁぁ!!」

妹の盛大なブーイングを背に、俺はいつも通りの時間に家を出た。まったく、これらを教訓にこれからはもっと早起きしてもらいたいものだ。

実に平和に、俺の時間は過ぎてゆく。しかし時々何か忘れているような、奇妙な焦燥感に囚われることもある。……きっとこれは、例の夢のせいだ。

そのせいなのか、幸福で充実しているはずの日常が時々色を無くす。絶対に忘れていてはならない事、忘れたくないことを思い出せない感覚。いったいこれはいつまで続くのだろうか。

「きゃ!?」

「おお!?」

気持ちの良い朝から始まった割には少々アンニュイな気分を抱えて自転車で走行していた俺。そんな風に考え事をしていたのが悪かったのか、不覚にも曲がり角から人が出てくるのに気が付かなかった。しかも相手は女性だ。なんとか避けられたが、なんという失態。か弱い女性に自転車でぶつかりかけるとは……!

「悪い、大丈夫か!?」

「は、はひ! だいじょうぶ、です」

慌てて自転車から下りて様子を窺えば、俺の勢いが強すぎたのか相手の女性……中学生くらいの女の子は少々面食らったようにのけ反った。どうやら驚かせてしまったらしい。

セーラー服に身を包んだその子はとても長い髪を、お団子に結ってから両サイドに流

すという特徴的な髪型をしていた。大きな目をしていて小さい鼻に可憐な桜の花びらのような唇。今も可愛らしいが、きっと将来は美人になる事だろう。そして俺はそんな女の子を見た瞬間、食い入るように彼女の顔を見つめていた。

「えっと、あたしの顔に何かついてます……？」

固まったまま見つめていた俺に、女の子は居心地悪そうに問いかけてきた。それによってはっと我に返った俺は、普段だったら絶対にしないような失態を続けて行った事に自己嫌悪を抱く。ぶつかりそうになった上に女性の顔をまじまじと見つめるなんて、マナーに欠ける。まったく俺はなにをやっているんだ。

……それにしても、誰かの顔を見て固まるなんてこれで”二度目”だな。前は男だったが。

とにかく、初対面の相手になんとも申し訳ないことをしてしまった。そう思ったら俺の口からは自然とこんなセリフが出ていた。

「驚かせてすまなかったな。……ところで急いでいるようだが、その制服は十番台中学校か？」

「え、うん、はい。そうですけど……」

「急いでいたようだし、ここから行くとしたら遅刻だろう。よければ驚かせたお詫びに送っていくが」

自転車の後ろを示せば女の子は驚いたように肩を撥ねさせた。う～ん、リアクションが大きくて見ていて面白い子だな。

「え!?　でも、」

「遠慮しないでくれ。ちょうど俺も通り道だし、負担にはならないよ。俺の妹も十番台だし、場所は分かる」

俺は先ほど自転車に乗せてけをわめいていた同じく遅刻組になるであろう妹のことなど記憶の隅に追いやって、更にお詫びにと申しでる。あまり強引にしてもいけないしこれで断られたら引き下がるつもりだが、女の子は数秒悩んだ後ぱっと顔をあげて人懐っこい笑顔で言った。

「え、えへへ……実は困ってたの。じゃあ、お願いしてもいいですか?」

「よし、乗ってけ」

俺が笑って後部座席を示すと、女の子は少し照れた様子ながら横乗りに乗った。ちょっと危ないが、スカートだからな。またがるのは恥ずかしいんだろう。

「そういえばお兄さんの名前は?　あたし、月野うさぎ!　妹さんって何年生?　どこのクラス?」

振り落とさないように細心の注意を払って自転車をこぎ出すと、女の子……月野さん

が問いかけてくる。こちらが申し出たからとはいえ見知らぬ相手の自転車に乗ったり話しかけてきたり、社交的というか人懐っこい子だな。ちょっと危なっかしい気もするが、見ていてなんだか微笑ましい気持ちになる。

「俺は土御門景衛（つちみかどかげもり）。元麻生高校の二年生だ。妹はたしか……二年四組だったかな？　土御門玲那（つちみかどれいな）って名前だよ」

「あ、そうなんですね！　じゃあ、あたしと学年は一緒だ！　あたしは一組なんです」

「そっか。もし知り合う機会があったら、よろしくな。ちょっとガサツだがいい子なんだ。……よく遅刻するから、話はあうかもよ」

「べ、別にあたしはいつも遅刻してるわけじゃ……お、多くはあるけど……」

最後の方をごにょごにょと濁しているあたり、この子も遅刻常習犯か。

「……余計なお世話かもしれないが、遅刻は良くないぞ。早起き頑張れ」

「ううっ。早起きニガテ……」

「ははっ、慣れたら大丈夫さ！　朝は気持ちいいぞ！」

「それが出来たら苦労しません～」

恨めしそうな顔で言われてしまい、苦笑する。う～む、やはり早起きは俺が思っている以上にハードルが高いようだ。気持ちいいのに。

その後月野さんを中学まで送り届けてから、俺も学校に向かう。ちょっと急がないと

俺も厳しいかな。とばすか。

俺は知らない。この時俺は、忘れていたナニカを思い出すきっかけをすでに手にいれていた事に。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「ちょっとうさぎ！　さっき自転車に乗せてくれてた人誰？　あれ、元麻生高校の制服

よね！」
「えっへへ～！　さっきぶつかりそうになったから、お詫びにって送ってくれたの！」
「きゃ～！　なにそれ紳士！　背も高くてかっこいいし、もしかして運命の出会いってやつ？」
　学校に着くなり、送ってもらっていた所を目撃していた親友のなるをはじめとしたクラスメイトの女子に興味津々と言った様子で尋ねられるうさぎ。うさぎも思わぬ出会いとラッキーにうきうきと詳細を語るが、ふと何やら思い至って首を傾げた。
「う～ん？　でも、運命の出会いとかっていうと、ちょっと違うような……」
「え～？　だってさっきの人格好よかったわよ？」
「そうなんだけど……」
　うさぎは先ほど少し話した青年……景衛のことを思い出し、思ったままに感想を述べた。

「ちょっと話し方が硬いっていうか、言う事がおじいちゃんみたいだったのよね。学校に来るまでず～っと早起きの良さを語られちゃった」

その頃、景衛は大きなくしゃみをして「風邪か？」と不思議そうな顔をしていたりする。

この二人が再び会う機会は、案外近い。

2じいや，同級生はタキシード～蘇る記憶

少々気になる出会いがあったものの、今日もまたつつがなく一日が終わる。俺は茶道部に入部しているのだが、部員人数は少なく実質同好会みたいなもんだ。だから毎日がっつり部活なんて事は無く、俺の帰宅は比較的早い方だと思う。

そして校庭から聞こえる運動部の掛け声を聞きつつ今日は帰宅することにしたのだが、欲しい本があったからちょっと寄り道することにした。そしたら街中で思いがけず同級生と出会う。

……何故か真昼間の商店街でタキシードを着こなしている同級生に。

「地場！　買い物か？」

「！　土御門か。いや、そういうわけじゃないんだが……ちょっとした散歩みたいなもんさ」

「そうか。そして俺はお前の格好に突っ込むべきか？　ツッコミ待ちと受け取っていいのか？」

「？　何のことだ？」

素か。素なのか。

俺はクラスこそ違うが、同じ学校の同級生である地場衛（ちばまもる）を前に困惑した。

地場衛。俺と同じ元麻生高校の二年生で、実は今朝知り合った月野さんを見た時のように、初めて地場を見た時俺は強い既視感のようなものを感じて固まった経験がある。

こいつは頭のいい奴で、高校の入学式の時新入生代表の挨拶を務めたのだが、壇上に上がったこいつを見て俺は呆然とその顔を見つめていた。同じ中学の友達に「え、お前ってソッチ趣味？」と言われるまで延々と、食い入るように見ていたらしい。俺に男色の趣味など無いが、それ以来地場はなんとなく気になる相手だ。だからある日図書館で読んでいた本を話題に話しかけ、それ以来時々話すくらいの仲にはなった。けどクラスが違うし地場は部活に所属するでもなく放課後は何故かさっさと帰ってしまうので、どうにも接点が少ない。だから友達というほど親しくないから、外で会うのは初めてだ。

……まさかこんなツッコミどころのある私服を着ているとは思っていなかったが。しかもタキシードに加えて何故サングラスまでしているんだ。パッと見お前を普通の男子高校生だと思う奴居ないぞ。

「あ～っと……。それって私服か？」

「？　ああ、そうだ」
「そうか……」
いうまい。ここまで堂々と着こなしているなら、こいつにとってこれはTシャツやポロシャツと何ら変わらない一般的な私服なんだろう。突っ込むのは野暮ってものだ。
俺は何と言っていいか分からない感情に口をもにょらせたが、気を取り直していい機会だと地場に何処かで茶でもしないかと誘った。下手なナンパのようだが、親しくなるいい機会だ。色々会話してみよう。
そう思ったのだが、話している途中でなにやら地場の顔にくしゃくしゃに丸められた紙がぶつかった。見ればそれを投げたのは今朝出会ったばかりの女の子。……妹と同じ中学に通う、月野うさぎさんだった。
地場は軽くため息をつくと、後ろを向いている月野さんに話しかける。
「……痛いじゃないか、そこのたんこぶアタマ。俺にまでたんこぶ作る気か」
紙がぶつかったくらいでタンコブは出来ないだろうが、道に紙を捨ててしかも人に当てるとはよろしくない。口を出さず、このまま見守っておくか。
「～～～～！　これはたんこぶじゃなくって、おだんごって言うのよ！　おだんごって！」
月野さんはおだんごをたんこぶと言われたのがよほど嫌だったらしい。振り返って

文句を言うが、すかさず地場の追撃が入る。地場は投げられた紙きれ……丸められたテスト用紙を広げると、無情にもその点数を読み上げた。

「三十点。もっと勉強しろ、おだんごアタマ」

そ、そうか……三十点か。そりゃ、もっと勉強しなくちゃな……。

何とも言えずに見守っていると、地場はぽいっとテスト用紙を月野さんに投げ返してからすっと背を向けて去って行った。ちなみにお茶に誘った俺に対しては「悪い、用事があるからまた今度な」とつれない態度である。……いい奴なんだが、どうにも誰に対してもちょっと壁を感じるんだよな。今度まためげずに誘ってみるか。

「よ、よけーなおせわよっ!!」

そして残された俺は、ムキーッとでも擬音がつきそうな様子の月野さんに声をかけてみることにした。

「月野さん。怒るのも分かるが、道にものを捨てては駄目だぞ」

「！　つ、つちみかどさん!?」

……俺、影薄いのかな。月野さんは俺に気づいていなかったのか、面白いくらいに驚いていた。そして俺の指摘に、体の後ろにテスト用紙を隠しつつしゅんっと肩を落とす。

「ごめんなさい……」

「いや、分かってくれたのならいい。それより、今暇かい？　よかったらケーキでもおごるよ」
「へ!?　え、えっと！　いきなりだと、ちょっと困るっていうか、あたし達、出会ったばかりだし！」
「ああ、別に変な意味はないから安心してくれ。実は同級生に断られてしまってね。一人でお茶するのも寂しいから、よければ一緒にどうかと思ってな」
　本音を言えば、地場と同じく俺に妙な既視感を感じさせるこの少女を、もう少し知りたいというのが俺の考えだ。地場には逃げられたし、せめてこの子ともうちょっと繋がりを作っておきたいな。まあ一人でお茶するより可愛い女の子と一緒の方がいい、というのも紛れもない本心だが。
　別に下心があるわけじゃないんだが、ティータイムには花があった方が嬉しい。目の保養は大事だ。
「あと土御門って長いだろ？　よかったら景衛って呼んでくれ。まあ一字しか違わないんだがな。それか景お兄さんでもいいぞ」
「あははっ、それだと七文字になって最初と文字数変わんないよ。え～と、じゃあ景衛さんって呼ぶね。あたしもよかったらうさぎって呼んでください！　……それにしても、それが素なら景衛さんってタラシよね。さらっと女の子お茶に誘っちゃうんだもん」

「そ、そうか？　むぅ……すまない。失礼だったろうか」
「いいえ！　むしろちょっと落ち込んでたし、嬉しいくらい！　あ、景衛さんってゲーム好き？　よかったらお茶した後ゲーセン行きましょうよ！　気分を発散したいんですっ」
「あ、ああ。わかった」
よ、よっぽど地場にからかわれたのが頭に来てたんだな。まあその前にテストの点数が残念だったってのもあるんだろうが。
その後喫茶店でお茶をした後、月野……うさぎちゃんがよく行くという「クラウン」というゲーセンに行ってセーラーVゲームというものをやった。俺はゲームの類は得意ではないから結果は散々で、うさぎちゃんと店のバイトのお兄さんに笑われてしまった。……ゲームって結構難しいんだな。スティックさばきとボタンの押し方がよく分からん。
とまあ、うさぎちゃんと交流を深められたのはよかったのだが、初対面の時ほど強い既視感は感じないため、俺の疑問は当分解消されそうにない。……まあ、いいか。残念ではあるが、人との交流が増えるのはそれはそれで良い事だ。一期一会。出会いとは得難いものである。出来た縁は、大事にしよう。

そういえば、ゲーセンに現れた額に三日月のような模様がある黒猫……。あの猫には既視感というより、なにか妙に惹かれるものを感じたな。以前夏休みに登山に誘われて、パワースポットなる場所に行った時と同じような感覚だ。

珍しい模様でどことなく神秘的だったし、縁起のいい猫なのかもしれない。今度会ったら煮干しでもお供えしてみるか。

そしてその後、時々地場を茶に誘いつつ、町でうさぎちゃんに会ったら挨拶しつつも、俺の時間はゆったりと今までと変わらず過ぎていった。充実しつつも時間の流れがゆっくりに感じるのは昔からだが、何かが足りない。

何か、やるべきことをやっていないような……妙な焦燥感。それが最近日に日に募ってゆく。

（俺は、何を忘れているんだろうな）

そう。きっと俺は、何か大切なことを忘れている。

ある日の夜。

俺が思い出したくても思い出せない何かに悶々としている中、突然家の電気が消えた。急いで懐中電灯を取り出して父と一緒に家族の安否を確認したが、母も妹も混乱はしているが特に物を倒してケガなどはしていないようだ。

しかし俺はどうしてもそれだけでは安心できず、それどころか体がぞわぞわと何かが這い上がるような不快感に襲われる。俺の中のナニカが、これがただの停電ではないと訴えてでもいるように。

（ただの停電では無いって、俺はいったい何を……）

困惑するも、体は家族の制止をふりきって外に飛び出していた。そして俺が目を向ける方向は、東京のランドマークのひとつ……東京タワー。

暗闇の中、塔の先端だけがぼんやりと光っている。

「行かねば……」

そうつぶやき、俺はふらりと一歩前に踏み出す。背後から家族が止める声が聞こえる

が、俺は止まらない。止まれない。

そしてそのまま、俺は電気の消えた暗がりの街の闇に消えた。

町の様子は変だった。どこもかしこも、この停電で混乱していても良さそうなのに静かすぎるのだ。車すら全て止まっている。誘導灯や懐中電灯の光すら見えない。非常電源がついた建物すら見受けられないのはどういうことだ。

まるで……完全なる闇の世界へと、日本の都心が墜落したかのようだ。

そして夜目に慣れてくると、道の所々で人が生気を失ったように倒れているのに気づく。助けようにもどうやら全ての人間がその状態のようで、俺だけでは手が回らない。そして俺の勘が告げている。……この原因は、きっと東京タワーの上にある。

しかし交通機関が全てストップしている今、己の脚だけで進む距離がなんともどかしい事か。

この様子では病院などの施設も同じ……きっとこの停電で幾人もの命が脅かされ、多分何人も亡くなった事だろう。そんなことがこれ以上あってはならない。

俺は自分に何が出来るかもわからないまま、歩を進める。「どうにかしなければ」という心だけに突き動かされて。

（けど、何故俺と俺の家族だけ無事だったんだ……）

ここに来るまでの間、意識のある人間と出会わなかった。しかし今走っている俺と、安否を確認した家族に異変は見受けられない。……そう言えば、以前も何やら似たようなことが無かっただろうか。たしか「幻の銀水晶」とかいううさん臭い宝石がタキシード仮面という謎の男に狙われていると、妙にテレビで特集されていた時に。まるで集団睡眠のごとく、多くの人間が倒れ伏した事件があった。……その時も、何故か俺の周りだけはなんともなかったのだ。

あの時と、今回の停電はどこか似ている。

そんな事を考えている時だ。ふと自分の体から、なにやらうっすら輝くものが漏れていることに気づく。この暗闇で気づかなかったのがおかしいくらいで、俺は思わずピタリと動きを止めた。

その燐光は俺の体から蝶が羽ばたくようにゆるりとした速度で、俺の体から東京タワーにむかって飛んで行く。俺はそれは生命エネルギーのようなもので、倒れている人々はそれが奪われたから倒れているのだと気づく。根拠はないが、間違いない。

しかし、俺の体からもれるそれはわずかだ。まるで何かが体から逃すまいと、押しと

どめているように。
訳が分からない。しかし、俺の体は俺の意志とは別に何かをしようとしているように感じる。
……だから、俺は自分の本能とも言うべき、原初的な何かに体を委ねることにした。何かしたいなら、するがいい。それでこの状況が何とかなるのなら。
俺はフラフラとした緩慢な動きで、街路樹に歩み寄るとその枝を一本手折る。しかし枝はわずかな抵抗もなく、容易く俺の手におさまった。枯れ枝でもなくまだ若い枝なのに不思議だ。
そして俺はその枝を地面に垂直に突き立てると、深く、深く、深呼吸する。そしてそこから通じる何かに……地中に血脈のように広がる”ソレ”に、呼びかけた。
途端、そこから中心に光が走る。そしてそれは周囲の大地にも広がり、コンクリートの道路も壁もすりぬけて、奪われたエネルギーを満たしてゆく。
「……はッ」
しかし、その途中で息切れした俺は喘ぐように残った息を喉から絞り出し、蹲る。どうやら俺が今しようとしていたことは、何かが欠けている今の俺では難しいようだ。しかし、わずかではあるが今ので周囲の人間にエネルギーが行きわたったようだ。幸いこの近くの病院や関連する施設の電気もついたところを見るに、そこまでは俺の力が及ん

だのだろう。
だが、これではまだ根本的に何も解決していない。何故ならたった今回復した場所からも、断続的にエネルギーの光が奪われているからだ。
（もとを絶たねば……！）
しかし、東京タワーは未だ遠い。
それでも重い足をもちあげて、タワーを目指して歩を進める。

そんな時だった。

『ムーンヒーリング　エスカレーション!!』

美しいオーロラのような光と共に、膨大な癒しのエネルギーが東京中を覆った。

俺ではわずかな回復しか出来なかったエネルギーを、空から降り注ぐ月の光のように

柔らかく、慈悲深い光があっという間に回復してのけたのだ。街も一気に電光を取り戻し、暗闇から一瞬で光に満たされる様は圧巻である。かくいう俺も、その光によってわずかながら奪われていた力が回復した。

そして回復と共に慈悲深き光は、俺に欠けていたものまで満たしてくれる。

それすなわち、”記憶”。

穏やかで美しい空、大地、海。天に浮かぶ、常世をも生きる長寿の生命たちが住む月の国。

そしてそれが黒と赤に染められて、やがて灰となり果てる様。

仕えるべきお方と、その方が愛した姫君が、死に絶えた絶望の記憶。

「……ッ!!　お、思い出したわい！　おおう、まったく、なんと嘆かわしい！　今ま

で何故忘れておったのか!!」

周囲の意識を取り戻した人間が、突然叫び出した俺(わし)をぎょっとしたように見つめる。しかしそんなもの気にならぬ！　それよりも、今のエネルギーは……月のプリンセスのものではないか!!

彼女が居るならば、もしやあの方も……。

居ても経ってもおられず、わしは大地の地脈からエネルギーを借りて地を駆る。その速度は人の脚では到底出せる速度ではないが、今は周囲の目など気にならん！

とにかく今は、東京タワーへ急がねば！

3じいや，じいやとセーラー戦士

月野うさぎは、ルナという額に三日月形の模様がある猫と出会った日から、正義の戦士セーラームーンとして目覚めた。ルナが言うには警察でも手におえない事件が多発しており、仲間を集めて敵を倒す事こそうさぎの使命なのだという。そして……使い方ひとつで星一つをも軽く吹き飛ばすほどの巨大なエネルギーを秘めた聖石、幻の銀水晶と月の王国のプリンセスを探し出して守る事も、戦士達の使命なのだとか。

うさぎはその日から自分と同じく新たに力に目覚めた仲間……セーラー戦士達と出会い、妖魔を操り人々から生気……エナジーを奪おうとする敵、ダークキングダムとの戦いを繰り返した。ダークキングダムは幻の銀水晶を探しているようで、そして……うさぎが初めてセーラームーンになった日から彼女のピンチを助けた、謎の青年であるタキシード仮面もまた幻の銀水晶を求め、探しているようだった。

タキシード仮面。

彼の正体は地場衛（ちばまもる）という、元麻生高校に通う男子高校生だ。話を聞けば、彼は両親を幼いころに交通事故で亡くしており、その際に自分の記憶までも失ってしまったのだという。

そんな彼は、事故以来何年も見続ける夢に出てくる「幻の銀水晶」を追い求めた。……自身の記憶を辿る、手掛かりと信じて。

そして、幾度目かの戦いにて。

東京中から電気とエナジーを奪うべく、東京タワーを利用した敵と相対した時。

エナジーを回復させるために技を使ったうさぎ。そしてそんな彼女を攻撃した敵からかばい、タキシード仮面はその胸を電光で穿たれた。

「いやあああああーーーーーーーー!!」

同時に、蘇る記憶。

うさぎたちが探していた月のプリンセスは、うさぎだったこと。

遥か大古の昔に栄えた月の王国シルバーミレニアムと、長寿の生命体である月の住人

が慈しみ見守っていた、美しき青い星……地球国。そこでうさぎの前世であるプリンセス・セレニティと、地球国第一王子エンディミオンは恋に落ちたのだ。

しかしその幸せも長くは続かない。ある日、ある預言者の娘と太陽の黒点から現れた邪悪によって意識を塗りつぶされ操られた地球国の人々は、月の王国へ攻め込んだのである。

月の王国の秘宝、幻の銀水晶を手に入れ地球を繁栄させるために。

エンディミオンはそのさいも、セレニティをかばって命を落としている。そして悲しみのあまり、セレニティは自ら命を絶ってしまった。

これでは、まるでその再現ではないか。

生まれ変わり、再び巡り合ったというのに。

その時だ。記憶を取り戻すと同時に、かつてのセレニティと同じドレスを纏う姿へと変わったうさぎの涙が、衛の頬に落ちた時……東京中を先ほどの比ではない膨大なエネルギーが覆った。その極光は全ての生命に活力を呼び覚まさせ、やがて光の中心である

涙は、ひと粒の結晶へと変化し光はそこへ収束する。

生まれた一粒の結晶。

それこそが、幻の銀水晶であった。

「！　なんと！　これほどのお力とは！」

「え？」

そしてその幻の銀水晶からこぼれた生命力にあふれる光を意識のない衛の中へと落としたうさぎだったが、突然聞こえた聞き覚えのある声に一瞬意識がそれる。そしてその視線の先には、この場には居るはずのない人間が居たのだ。

「景衛さん!?」

なぜか東京タワーの鉄塔にへばりつくようにしがみついて「よいせ」とひといきに上りきったのは、ここ最近よく会うちょっとじじくさい高校生だった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

地球国の事も月の王国の事も、そして我が主であるエンディミオン様の事を思い出したわしはとにかくひた走った。

かつてこの身は、占星術や地球の自然エネルギーを操ることで地球国に「魔術師」として仕えたじじいだったのだ。そしてわし個人として仕えていたのは、いずれ地球国の王になったであろう聡明なエンディミオン様。生まれた時からお世話と教育係を仰せつかっていただけに、仕えるお方という以上に、恐れ多い事だが息子か孫のようにも思っていた方でもある。エンディミオン様も「じいや、じいや」と呼んで慕ってくれたものだ。

わしは月の女王が娘を亡くしたことで決意し、あの邪悪を封印するまでを見届けた。そして時には”賢者”などと呼ばれたくせに、結局何も出来なかった愚かで蒙昧なるわ

が身を呪い、死に際に転生を願ったのである。……今度こそ、生まれ変わったあの方をお守りするために。

そして月のプリンセスのエナジーを頼りに、強化した身体能力で生身で東京タワーを上るという、普通に考えたら正気の沙汰ではないことをやってのけたわし。じゃが、この程度なんだというのか！　月のプリンセスが居るのなら、きっとお傍にエンディミオン様も居る。そしてあの方たちがまた”あれ”と戦っているのならば、わが命を捧げることになろうと、今度こそお守りするのだ!!

だが東京タワーを目的の位置までのぼりきったところで、わしはまた間に合わなかったことを知る。

「！　なんと！　これほどのお力とは！」

登り切る直前に感じた、先ほどよりも強力な慈愛のエナジー。その力に思わず感嘆の声をあげると、懐かしきセレニティ様のお姿をした……うさぎちゃんがこちらを見た。しかし彼女の正体に驚く間もなく、うさぎちゃんの膝に目を閉じたまま横たわっている主の姿に心臓が凍り付きそうになる。

地場……！　否、エンディミオン様！

そして主に害をなしたであろう敵を睨みつけんと、東京中からエナジーを奪い取っている怨敵に目を向ける。

しかしそこに居たのは思いがけない人物だった。視線の先に居たのは、背の高い長髪の男。……その顔を、わしはよぉく知っておる。

「クンツァイト貴様ぁぁ!!　何故おぬしがエンディミオン様に仇なしておるのじゃ!!」

言うなり、わしはベルトに挟んでいた枝を引き抜いて鉄塔の上から助走をつけて跳躍し、かつて自身と同じくエンディミオンに仕えていた騎士に殴りかかる。

「なんだ貴様は!　……!?　ぐっ、頭が……!　ちぃッ」

長髪の男、クンツァイトは何かに苦しむように頭を押さえるが知った事ではない。理由はどうあれ主に手を出したのだ!　まず一発殴らんとわしの気がおさまらんわい!

しかしクンツァイトが腕を振り払うようにすると、発生した電気をまとった突風がわしの体を押し返す。そして考え無しに跳んでしまったが、ここはそういえば東京タワーの上じゃった。

「ぬおぉぉぉぉおおぉぉ!?」

どこか捕まる場所もなく、重力に従ってあえなく転落してゆくわが身。

な、なんということじゃ!　頭に血が上り過ぎた。記憶を取り戻したばかりでは、ま

だ思うように地脈のエナジーを扱う事ができんというのに！　実はここまで上りきるので精一杯だったんじゃぁぁ!!

「む、無念ッ」

「危ない！」

　しかし覚悟を決めて目を瞑ったわしを、誰かが抱きとめてくれた。そして目を開けてその誰かを見れば、これまた懐かしい顔ぶれ。

「おお！　ヴィーナス殿！　それにマーキュリー殿、マーズ殿、ジュピター殿！　助かりましたぞ！」

「え、ええ。あの……あなたって……」

　わしを助けてくれたのは、セレニティ様をお守りする月の四戦士の方々だ。どうやらジュピター殿のお力で浮遊しているらしいの。

　しかしどうやらわしの事が分からないらしく、困惑している。……そりゃそうじゃ。我がことながら、こんなぴっちぴちの若者がじじい口調で話しかけて来たら困惑もするだろうて。

「わしですじゃ。ヘリオドールですじゃ！」

「！　ヘリオドール殿ですって!?」

「ええ！　ですが、驚くのは後にしましょうぞ！　助けてくれたことに礼は言いますが、

今はセレニティ様とエンディミオン様をお守りせねば！」
「え、ええ。もちろんよ！　よくわかんないけど、色々後回しよ！」
さすがは四戦士のリーダーであらせられるヴィーナス殿だ。すぐに意識を切り替えて、仲間と共にバリアを展開しながらセレニティ様とエンディミオン様の前へ出た。
そしてわしは改めてクンツァイトを見る。……すると、その背後に見覚えのある姿の影が揺らめくのを見て唇をかみしめる。そして叫んだ。
「やはりお前か！　我が弟子ベリルよ!!」
そこに居たのは、かつての弟子の姿だった。

4じいや，かつての弟子は今日の敵

わしの前世は遥か古代、地球という星そのものがひとつの国だったころまで遡る。現代にいたるまで、覚えてはいないがおそらく何度か転生を繰り返したことだろう。しかしその生ではきっとエンディミオン様に巡り会えず、その生涯を終えたのだ。

そして現在のわしの名は、土御門景衛。前世の名前はヘリオドール。

記憶を取り戻すことですっかり口調が前世へと戻ってしまったが、聞く人間からすればおそらく口ぶりでわかるだろう。……わしは、前世ではたいそうなジジイじゃった。

たいそうなジジイで後どれくらい生きれるのか分からなかったわしは、己の後継者たるべき弟子を探していた。わしが死んだ後も王子と地球国を陰ながら守り支える、才能ある者を求めたのである。

王子の側近たる四人の騎士も才能こそあったが、彼らには彼らの役割がある。王子と同じく教育者としては関わったが、師匠と弟子、という間柄では無かった。

そんな中で、わしは一人の娘を弟子に選んだ。わしに弟子入りする前から先読みの力にすぐれ、幾度も故郷や人々をその力で救った素晴らしい預言者の卵じゃった。

その娘の名は、ベリル。

後に地球国の先導者として月の王国シルバーミレニアムに攻め込み、エンディミオン様を殺した張本人である。

わしはクンツァイトの背後に現れたベリルの陰に、やりきれない思いで名前を呼ぶ。しかしベリルはわしの言葉など聞こえていないようで、昔と変わらぬ美しい赤髪を悪鬼のようにうねらせて、整った顔を歪めてクンツァイトに命じた。

『クンツァイト、今だ！　我がダークキングダムのために、プリンセスと幻の銀水晶を奪え！』

その言葉に応じてクンツァイトが動く。奴の手のひらからは一点に集中させたエナジーが放出され、プリンセスとエンディミオン様を守っていたセーラー戦士達のバリアを貫通した。

「いかん！」

咄嗟に掴んでいた枝を前に突き出してわしも結界を張るが、セーラー戦士達四人がかりのバリアをも突破した攻撃に対して、それはあまりにも焼け石に水じゃった。しかしわしは結界で出来た一瞬の間に、クンツァイトにしがみついた。どうやらこやつ、体勢を崩しつつもプリンセス……うさぎちゃんを守ろうとした戦士達の突破は難しいと考えたのか、銀水晶からこぼれた力に満ちた光をその身に宿した、エンディミオン様だけでも攫おうと手を伸ばしたらしい。今の貴様にエンディミオン様は渡せんわい！

「く、また貴様か！　邪魔だ！」

「おうおうおう！　デカい口きくようになりよって！　言っとくがわしゃあエンディミオン様だけでなくおぬしらのオムツも取り換えた事あるんじゃからな！　己の役割も忘れて敵に与したひよっこが、わしに偉そうな口を叩くなど千年早いわい！」

「お、オムツだと!?　何をわけのわからぬことを……」

わしにしがみつかれながらも、なんとか念力でエンディミオン様を引き寄せたクンツァイトが、わしを落とそうとぐいぐい押してくる。ええい、忌々しい！　こちとらしがみつくだけで精一杯じゃというのに!!

しかしふと、なにやら一瞬クンツァイトの表情が変わる。

「まさか……ヘリオドール……様……？」

「!?　なんと！　おぬし、思い出したのか！」
忠誠心の高いクンツァイトらが我らが怨敵に快く手を貸すことなどありえぬ。だから記憶を思い出さないままに、操られているのだろうとは思っていたが……。もしや、先ほどの銀水晶の光をあびて正気に戻ったのだろうか。
しかし歓喜に震えようとしたわしの身を、黒い稲妻が襲った。
「ぐあ?!」
『何をしてる、クンツァイト！　このさいプリンセスは後回し。その男だけ連れて戻るのだ！』
どうやらそれを成したのは、クンツァイトの背後の空間の歪みに居るベリルのようだ。どうやらあの歪みは別の場所へと繋がっているらしいのう……。おおう、臭い臭い！　臭いよるわ！　ベリルの背後から、腐敗臭を放つ毒壺のようなエナジーの波動を感じおる！　やはり此度の黒幕もあやつか!!　あの忌まわしい、太陽の黒点が生んだ化け物か!!
しかし稲妻に穿たれ、吹き飛ばされたわしは怨敵を前にしてもなお……エンディミオン様が攫われる様を見届けるしかなかった。その情けなさに己を殺したくなるが、このままでは終わらせんと、ぐっと握った枝にありったけのエナジーをこめる。
そして落下に身をまかせつつも、その枝を空間の歪みの向こう側へ向かって、思いっ

きり投げた。

「ぶわっかもーーーーーーーーーーん!!!!!!　目を覚ますんかい馬鹿弟子ぃ!!」
『だぁあ!?』
「ベリル様?!」

ベリルめの間抜けな声と、クンツァイトの驚愕の声を最後に……空間の歪みや奴らを飲み込み、消失した。……まんまと逃げられたのである。
「っと!　ほっ!」
後悔と憤怒の心に駆られる前に、落下する体を止めるべく東京タワーの一部にしがみつく。先ほど弾き飛ばされた時はまったく何もない虚空だったが、今度は運よく掴まる物があって助かった。かなり消耗はしたが、この程度こなせるくらいの身体強化はまだ可能だ。ふーい、ひやっとしたわい。
しかし安心する間もなく、鉄塔に捕まっていた片手を何者かに掴まれる。……ヴィーナス殿だ。

「あたし達もいったんここから撤退します！　転移するので、あなたも来てください。……ヘリオドール殿」

彼女の背後には、涙を流すうさぎちゃんを守るようにマーキュリー殿、マーズ殿、ジュピター殿が彼女を囲んでいる。マーキュリー殿が通信機らしきものでどこかに連絡をとっているので、きっとその相手の場所に転移するのだろう。

わしが頷かない道理は無かった。

「連れていってくだされ。わしに、あなた方の力にならせてほしい」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「おのれ、あのジジィめ……！　あやつまで転生してきておったのか……！」

クイン・ベリルは赤くなった額を押さえながら、己にぶち当たった枝をその美しい手

で忌々しそうにへし折った。

先ほどプリンセスと銀水晶本体を手に入れる事は叶わずとも、銀水晶の光を身に宿した男を手に入れる事は成功した。よって多少不満は残るが、今までに比べれば上々の結果だとベリルはそれなりに機嫌がよかったのだ。なにしろジェダイト、ゾイサイト、ネフライトの四天王三人を消費しても見つけられなかった銀水晶を発見し、ついでにその力の一部をも手に入れられたのだ。水晶本体もプリンセスとセットとなれば、最早探す必要もない。いずれはプリンセスごと手に入れればよいのだ。

地道にエナジーを人間どもから奪い探索に力を入れていた今までに比べ、なんと楽な事か。

しかしその上機嫌に、最後の最後でケチがついた。それがこの枝である。

ベリルが仕える大いなる支配者、クインメタリアに銀水晶のエナジーを捧げるためにベリルは先ほど咄嗟にクンツァイトへと座標をあわせて空間を繋げた。結果そのおかげで男を攫う事に成功したのだが、なんと空間を閉じる直前、ベリルが繋げた空間に無理やりエナジーをこめられた枝が割り込んできたのである。それも、結構な速度で。

枝はベリルの額の装飾品を吹き飛ばす勢いで彼女の額に一直線にぶち当たり、見事なタンコブを作った。そしてベリルはその一撃を受けたことで、先ほどまでクンツァイトにしがみつき邪魔をして来ていた男が何者なのか、その正体を知る。

頑固なジジイだった。融通の利かないジジイだった。……そして、甘いジジイだった。

修業の最中にちょっとでも居眠りすると、ジジイの筆記用具がよくベリルの額に突き刺さったものだ。その感覚をベリルが忘れるはずもない。

宮廷魔導士ヘリオドール。ベリルの師であるそのジジイが、若い姿であの場に居た。それすなわち、ジジイも転生したことに他ならない。

（しかし、貴様に今さら何ができる！　あの時何も出来なかった、貴様が!!）

額のタンコブを痛そうに押さえつつ、しかしベリルは嗤う。苔むした爺さんに用はないとばかりに、見下すように。

そこにはかつてヘリオドールが娘のように愛した愛弟子の面影は、何処にも残っていなかった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

あの後わしは、ヴィーナス殿達と一緒に転移した。なんとその先は先日うさぎちゃんと遊んだゲームセンター「クラウン」の地下というのだから驚きじゃ！　そして先で待っていたのは、いつぞやの額に三日月のマークがある黒猫と白猫……。かつてはあまり交流は無かったが、セレニティ様の側近であったルナ殿と、彼女の伴侶であるアルテミス殿だった。

その日は泣きじゃくるうさぎちゃんをなだめ、思い出した記憶を辿ることで時間を費やして終了した。それ以上はうさぎちゃんの体力がもつまいと、とりあえず家に帰ることを進めたのじゃ。

この時にわしとセーラー戦士達は、情報交換をするために連絡先の交換と現世の名前での自己紹介をした。そして聞いた名は、ヴィーナス殿が愛野美奈子さん、マーキュ

リー殿が水野亜美さん、マーズ殿が火野レイさん、ジュピター殿が木野まことさん、という名前らしい。う～む、見事にそれぞれ守護星の文字を苗字に冠しておる。美奈子さんだけ愛の文字じゃが、これは金星を意味する女神が司るものじゃな。これも運命か。

そして後日、うさぎちゃんが回復したら情報交換を兼ねて会合の場を設けようという事になったが……。その後一週間ほど、うさぎちゃんは学校にも姿を現す事は無かった。

無理もない。記憶を取り戻したばかりだというのに、前世の再現を見せつけられたようなものじゃ。その心に負った傷は深かろう。

しかし彼女はこれまで、最近世間で噂の正義の戦士セーラームーンとして戦ってきた。心強い仲間もおる。……きっと立ち直るはずじゃ。亜美さんも「うさぎちゃんは泣き虫だけど、とっても優しくて、そして勇敢な子です。だから泣き寝入りで終わるような、弱い子じゃありません」と言っていたしな。心配ばかりするのは失礼じゃろう。

わしとしてもエンディミオン様の安否が心配で夜も眠れんが、きっとあの方を助けるためにはわしだけでは力不足。プリンセスとセーラー戦士達と力を合わせなければ。先走って自爆しては、死んでも死に切れぬ。……実際先走ったせいで一回死にかけたしのぉ……。

そしてある日、わしはうさぎちゃんの家に訊ねるから一緒に来てはどうかと誘われた。

一応手土産に焼き菓子を用意しつつ、何かうさぎちゃんを元気づける何かが出来ないかと考える。

そしてあることを閃いたわしは、妹の部屋によってから美奈子さん達と合流した。

……あのお方は、エンディミオン様が愛した笑顔で笑ってくれるだろうか。

「あら、まあまあ。毎日心配かけて、ごめんなさいね」

そう言ってわしらを招き入れてくれたうさぎちゃんのご母堂は、若々しくお美しい方だ。うむ、流石はプリンセスの母君！　雰囲気は違うが、クイーン・セレニティ様ともどことなく似ている。

亜美さんがうさぎちゃんの様子を尋ねると、母君は困ったように眉尻をさげて憂い気にため息をつく。聞けばうさぎちゃんは部屋から外へ出ず、食事もほとんど食べていないらしい。よほどショックなことがあったのかと母君も心配しておられるが、これはいかん。いかなる時も、食事だけはとらねば。

そう思って、わしは持参した手土産を母君に渡す。

「つまらないものですが、良ければお受け取りください。うさぎさんも以前好きだと言っておりましたので、お口にはあうと思いますじゃ」
「あら、あなたは初めて見るお顔ね。……じゃ？」
「おお！　申し遅れました！　わしは……うっ」
自己紹介しかけたところで、笑顔の美奈子さんからさりげない角度で脇に肘をドスっと入れられた。お、おおう。すみませぬな。どうにも口調がまだ安定せんもので……。家でもうっかりこの調子で話したら妹の玲那に「ついにお兄ちゃんがジジむささが行き過ぎてボケた……！」などと言われてしまうし。……けど、肘はちょっと痛いんじゃ……。
とりあえずわし、否俺は咳ばらいをすると改めて自己紹介をする。
「申し遅れました。俺は土御門景衛と申します。俺もうさぎさんとは友達だったので、体調不良とうかがって心配になりまして……。こうして訊ねさせていただいた次第です」
「まあ、礼儀正しい子ねぇ。うふふっ。亜美ちゃん達といい、うさぎはいいお友達をもったわ！」
そう言われると、なんだかこそばゆいものがあるな。
そして母君に挨拶を済ませたわし……じゃない、俺たちは、うさぎちゃんの部屋へと

向かった。

そして部屋へ入ると、意外と元気そうなうさぎちゃんの姿。しかしその髪の毛は今まで以上に長く伸びており、初見で思わずぎょっとする。どうやら美奈子さんが言うには、記憶をいきなり取り戻した影響とのこと。……そういえばセレニティ様は、とても長い髪をされていたな。

うさぎちゃんは美奈子さんに髪の毛を整えてもらった後、タキシード仮面（実は地場というかエンディミオン様が真面目にその名前を名乗っていたのかとその場で空気を読まず二、三回聞き返してしまった）……エンディミオン様の話題をふられると、今までの落ち着いていた様子を一変させて再び取り乱した。しかし俺が出るまでもなく、美奈子さんがうさぎちゃんをなだめる。

そしてルナ殿の提案により、ダークキングダムの場所を突き止めエンディミオン様を助けるためにも……月の王国の記憶を辿り、光を失った幻の銀水晶の秘密を知るためにも彼女たちは月へ行く事が決定した。

ううむ……。やはりおいぼれのわしの力など借りずとも、彼女らは強いな。そしてその絆に、憧憬の念が浮かぶ。

……何しろかつての弟子も仲間も、わしの方はみ～んな敵の手に落ちておるからのぉ。まったくたまらんわい。おっと、また思考がジジイに戻っておる。こりゃあ外側で取り繕っても、早々戻りそうにないのぉ。

しかし、ジジイにも出来ることがあろうて!!　わしだってプリンセスを元気づけたいんじゃ！

そして意気込んだわしは、ここに来るまでず～っと着ていた、今の時期には似つかわしくないロングコートに手をかけた。そして渾身の台詞と共に、脱ぐ!!

「プリンセス殿！　このわしも出来る限り力になりましょうぞ！　というわけで、何事も形からですじゃ。わしもまた伝統の月の王国の戦闘衣に倣って、この姿でお供いたしますぞ！」

わしが着ていたのは、セーラー戦士をセーラー戦士たらしめるシルバーミレニアム伝統の戦闘衣、セーラー服！　妹の物なのでピッチピチに伸びておるが、そのような事は些事よ!!

今のわしではどこまで役立てるかわからん。じゃが、せめて形からでもあなた様の味

方であり、共にエンディミオン様を助けるため戦う仲間と思ってほしいのです！

「「「「……」」」」

何故か沈黙が長い。

「ふむ、やはり決めポーズや決め台詞など必要でしょうか？　では、お恥ずかしながら披露いたしましょう。

「「「「……」」」」

やはり沈黙が長い。ふむ、これは待っていてくださると思ってよいのですな！

わしは少々照れつつも、コホンと咳ばらいをするとピシッとポーズを決めた。

「セーラーヘリオドールいざ参る！　地球に代わって説教じゃ！」

「「「「……」」」」

やはり沈黙は続く。はて？

しかし、突如として声が爆発した。

「ヘリオドール殿がボケたわ！　どうしよう!?」

「か、か、景衛さん、あはは、あはははははは!!　ちょ、かげもりさん、いきなり、なに、おかし―！　あはははは！」

「うさぎちゃん！　うさぎ！　笑ってる場合じゃないわ！　いや笑ってくれたのは嬉しいんだけど！　ああもう、これはどうすれば!?」
「レイちゃん落ち着いて！　冷静に悪霊払いをするんだ！」
「！　そ、そうね。そうよ、これはきっと狐憑きか何かだわ！」
「土御門さん、とりあえず着替えてください！　見ていられませんから！　ああでもちゃんとすね毛が剃ってある!?」
　美奈子さん、うさぎちゃん、レイさん、まことさん、亜美さんと、口々に言葉が飛び交う。
　それを見てわしは笑顔のまま納得した。

うむ、なにやらやり過ぎた。

まあ、うさぎちゃんが笑ってくれたのだ。今はそれでよしとしよう。

5じいや，今明かされる衝撃の真実！

少々騒がしくなってから数分後。

わしのセーラー戦士姿でずいぶん皆様方を驚かせてしまったが、結局のところうさぎちゃんが「意外と似合っている」と言ってくれたことでなんとか場は落ち着きを取り戻した。おお、月のプリンセスからお褒めの言葉を賜れるとは！　笑顔を見る事も出来たし、妹に怒られるのを覚悟でセーラー服着てきたかいがあったわい。

けどわしの体格で伸び切っておるから、あとで弁償しないとのぉ……。むむう、日々の健康管理のお陰で運動部でもないのにわし、結構体つきよいからなぁ……。きっと脱いだら、もうよれよれじゃ。さて、弁償するのはいいとして、なんと言い訳しようか。わしが着たと言えばますます「ボケた」と言われそうじゃし……。……まあ、後で考えればよいか。

ともあれ月に行く、という方針が決まったところで、うさぎちゃんも居るわけだし改めて自己紹介と情報交換をせねば。ここ一週間、それが出来んかったからの。

わしはうさぎちゃんの母君が置いていってくれた茶で喉を潤すと、五人の乙女たちを

見回した。

「えー、では。改めて自己紹介をさせていただこう。わしは今の名前を土御門景衛（つちみかどかげもり）と申しますが、前世の名前はヘリオドール。ご存知かと思われますが、エンディミオン様のお世話係、教育係を仰せつかっていたジジイですじゃ。此度の生で再び皆様方にお会いできて、嬉しゅうございますぞ」

「な、なんだか景衛さん、すっかりおじいちゃん言葉になってるのね……」

　他四人と違って記憶を取り戻す前のわし（オレ）を知っているうさぎちゃんは、どうも違和感が拭いきれないようで複雑な表情をしている。ま、当然じゃろうな。

「前世は今の体の数倍生きておりましたからなぁ……。経験が追加された分、前世にひっぱられた形ですわい。やっぱり変ですかのぉ?」

「まあ、見た目は若いお兄さんだしなぁ……。かっこいいし……」

「おお、これはこれはジュピター殿!　いやまことさん!　光栄ですなぁ、この爺めをそんな風に言って頂けるとは!」

「い、いえ」

　かっこいいなどと褒めてくださったまことさんの腕をとって感動を表すべく上下にふれば、何故か困惑させてしまった。うむ、体と中身でギャップがあるとやはり変か。しかし困ったのぉ。どうもしっくりきすぎてしまって、なかなか戻れそうにない。普段

は取り繕う事になるじゃろうが、せめて事情を知る方たちの前ではこのままでいたいのだがなぁ……。

「これが本当のじぇねれーしょんぎゃっぷというやつか……」

「いえ、ヘリオドール殿。ジェネレーションギャップは、中身と外見の年齢差を表す言葉ではありませんよ?」

「はっはっは。わかっておりますよ。まあまあ、いいではありませんか。ところで美奈子さんや、ヘリオドールではなく良ければ現世の名前で呼んではくださりませんか。敬語も必要ありませぬ。なにしろ、我らは今や同志なのですから」

「えっと……。うん、わかったわ。じゃあ景衛さんも敬語は無しで、あと良ければうさぎちゃんみたいに美奈子ちゃんって呼んでほしいわ。そっちの方が親近感わくでしょう?」

「そうですかな? では、お言葉に甘えよう」

美奈子さん……否、美奈子ちゃんのはからいで、お互いの素性を知って以来、どことなくぎこちなかった空気が少しだけ緩んだ。ありがたいことじゃ。

そして互いに雑談を交えて現世でのことを話しながら、徐々に話題を転換させてゆく。それすなわち、此度相対している敵に関する事じゃ。わしの持ちうる限りの地球国側からの情報とシルバーミレニアム側の情報を擦り合わせれば、月に行く前に別の何か

が見えてくるかもしれん。情報の共有は大事じゃからな。この機会にしっかりしておかねば。

「ところで、美奈子ちゃんはクンツァイトのことは覚えておるかの?」

「!　え、ええ……。覚えてるわ」

「あなた様もセレニティ様を地球から月に連れ戻すために、よく王宮へいらしてましたからなぁ……」

「あの、クンツァイトって……あなたがあの時呼んでいた、敵の男ではありませんか?ごめんなさい、あたし達の方は美奈子ちゃんより遅く記憶を取り戻したから、まだ完全に思い出せてはいなくて……」

律儀に手をあげて質問してきたのはマーキュリー殿こと亜美ちゃんじゃ。清楚な佇まいは生まれ変わった今も変わらないようで、その真面目な様子に懐かしさと共に好感を抱く。いやはや、記憶を取り戻さずとも前世と同じような人格形成がされるというのも、考えてみれば不思議じゃの。性格など生まれた環境でどうとでも変わるだろうに、今の彼女たちを見る限りわしが抱く違和感はない。懐かしいばかりじゃ。

そしてわしは亜美ちゃんの質問の答えるべく口を開いた。

「クンツァイト、ゾイサイト、ネフライト、ジェダイト。この四人は、エンディミオン様の側近である騎士でした」

「側近ですって？　じゃあ、なぜ今敵側に……。……あっ」
「おそらく操られて……どうかしたかの？　レイちゃん」
「い、いいえ。ちょっと、ね。ごめんなさい、続けて」
　何故か少々顔を青ざめさせたマーズ殿ことレイちゃんの様子が気になったが、わしはコホンと咳払いしてから続ける。
「皆様方は、前世での戦いについてどれほど覚えておいでか？　……かの戦いでの首謀者を、覚えておいでだろうか……」
　知らず、語尾が尻つぼみになると共に罪悪感がわしの心を苛む。そんな資格、ありはせんのに。
「首謀者……ですか。そもそも、あの戦いは地球を黒い雲と石柱（メタリス）が覆っていき、それに伴って人々の心も暴走し始めたように思えます。そして地球国の人々は、一人の……女を頭目として、唯一完璧に正気を保っていたエンディミオン様の制止も振り払って、月に攻め込んできた」
　女、と言う前に、亜美ちゃんがうさぎちゃんを一瞬ちらっと見て、言い辛そうに言葉を紡いだ。……その気持ちも分かるわい。なにしろ、その女が……我が弟子ベリルがエンディミオン様を殺したのだからな。
　わしも重い体を引きずってなんとか月まで渡ったが、追い付いた時、まさにその現場

に出くわしたのじゃ。……あまり、うさぎちゃんの前で話したくない気持ちも分かる。
だが、必要な事じゃ。ここから話さねば、今回の敵について追及も出来ぬ。
「そう。そしてその女じゃが……。この間の戦いでクンツァイトの背後、歪んだ空間の向こうにいた女こそ、そやつの転生体じゃ」
「なんですって!?」
「!」
一瞬、うさぎちゃんの肩がビクッと跳ねる。ううっ、心苦しい……!　しかし、怯えながらもうさぎちゃんの瞳には立ち向かう勇気もともっておる。ここでわしが躊躇してどうするのだ!
「そして、その女の名はベリル。……わしの、弟子だった娘じゃよ」
「なっ!」

その後、わしはわしから見た視点での一連の出来事を語った。

ある年の事だった。

わしとベリルは、異常な数の流星群が降った夜に……太陽の暗黒点から、邪悪な何かが地球に流星と共に落ちてくるのを観測した。そしてその日から地球に黒い雲が広がり、石柱（メガリス）の群れが地表を覆い始めたのである。それに伴い人々の心は段々と攻撃的になってゆき、それは王族や、クンツァイトら騎士も例外ではなかった。

この事態を重く見たエンディミオン様は、唯一自身と同じく完全に正気を保っているこのわし、ヘリオドールに暗黒の雲の中心の調査について相談してきた。わしもまたこれが唯事ではないと感じていたから、すぐに自分が行くと申し出た。……なにしろ、予言者の側面を持つわしにさえ、暗黒が現れてから先の未来が見通せなくなっていたのだから。いや、唯一見通せてはいた。……予言ともいえぬ、ただひたすらに死と黒で塗りつぶされた世界が見えたのだ。

しかし、そんな折だった。我が弟子ベリルが自分が行くと申し出てきたのである。

わしはもともと、自身の命が長くないと悟ってベリルを後継者に育てていた。だからわしの体調の様子も芳しくないことも手伝って、エンディミオン様は心苦しそうにしながらもベリルに調査隊の長を任せた。調査隊はベリルと同じく、比較的心を正常に保っている者の中から選ばれたが……。あの時わしが無理にでも自ら赴いておれば、少なくともあの娘の心は穏やかであったじゃろうか……。

「あの、心穏やかにって？　……何があったんだ。あの女、貴女の弟子に」

わしがしばし俯いて沈黙しておると、まことちゃんが心配そうに新しいお茶を差し出してくれつつ聞いてきた。ぬう、心配させてしまったか。申し訳ない。

「……ベリルは、心の隙間に付け込まれたのじゃよ。あの邪神とすら言える強大な力を持った、唾棄すべき化け物に」

わしは腹をくくって、うさぎちゃんを見た。

「ベリルはのぉ……。エンディミオン様に、恋をしておった」

それを聞いたうさぎちゃんも、他の四人も息をのむ。

わしはまことちゃんが淹れ直してくれたお茶で喉を湿らせると、言葉を続ける。

「そして、セレニティ様に激しい嫉妬の念を抱いておった。そこをまんまと邪神につけこまれ、心を闇に染められた。そしてきっと、月の王国の力を狙った邪神にとってベリルは駒として都合がよかったのだろうな。ベリルの恋敵は、月の王女。しかもエンディミオン様とは相思相愛じゃ。どうすればエンディミオン様を手に入れられる？　恋敵を排除できる？　……きっと、きっかけはそんなところじゃ。ベリルが最初に思った事は。そしてベリルは邪神にまんまとそそのかされた。結果は、わしらの前世のあの通りというわけじゃよ」

ベリルは人々を先導する時、「月は管理者気取りで身勝手に地球を支配している」という思想を広めた。……彼らはたしかに文明的にも体の能力的にも地球人より優れてい

たが、だからこそ穏やかで余裕があり、とても優しかった。そんな隣人を倒すべき敵だと言い始め、時を同じくしてあの邪神もテレパシーのような思念でもって、人々の心に疑念を吹き込んでいったのだ。

抗えたのは、エンディミオン様だけ。わしは奴の思念には抗えたが、もともと地球の自然エネルギーを取り込み、操り、魔術を使っていたわしは……地球を内側から侵食する奴に、体の方をやられてしまった。汚れた自然エネルギーを取り込んだことで、急激に寿命が縮んだのだ。

ベリルが月に攻め入る時は、歩くこともままならなかった。それでもほとんど気力のみで、這う這うのていで駆けつけた時は全てが終わっていたというのだからお笑いじゃ。……まったく笑えんが、己が実に滑稽で、お笑いじゃ。

わしは老いさばらえ病に侵された体で……なんとか地球国の復興に努めようとした。しかし、最早何もかもが遅かったのじゃ。結果的にわしは地球と月の王国の滅亡を、見届けるしか出来なかった。

なんとも情けなく、惨めなじゃったのぉ……。

「……わしが、甘かったのじゃろうなぁ……。一度だけ、ベリルに刃を向けたことがあった。しかし、躊躇してしまった。随分厳しくもしたが、娘のように思っておったから……わしには殺せなかった。不甲斐ないジジイで、申し訳ない」

「そんな、謝らないで!　……あたしだって、例えば弟が悪いことして、殺さなきゃいけないなんてなっても……できないもん」
……まこと、情けないわい。傷ついているプリンセスに気を使わせてしまうとは。
「……ともあれ、あのベリルがクンツァイトの影におった。となれば、必然とその背後に居るのもあの邪神だろうよ。つまり此度の戦いは、我々の前世から続く因縁に終止符を打つものでもある」
「因縁……か」
「なんだか、景衛さんの話を聞いて敵の正体が具体的になってきたわね。今まで以上に、負けられないって気持ちがわいてきたわ」
「ええ」
セーラー戦士達の瞳に闘志の炎がともる。
そしてわしは再びうさぎちゃんを見た。今度は近くまで歩いていって、膝をついてベッドに座る彼女に視線をあわせる。
「それでのう、うさぎちゃんや」
「う、うん」
「ベリルはエンディミオン様に、恋しておった。今のあ奴の心はわからぬが、きっとかつて世界を支配しようとしてまで手に入れたいと焦がれ、愛した相手を……殺すはずがな

いと、思わんか？」

「あ……」

うさぎちゃんは、はっとしたように口元を手で覆う。そして涙で潤んできた瞳を見つめ、わしは今出来る精一杯の笑顔でもって言った。少しでも彼女が安心できるようにと、祈りを込めて。

「エンディミオン様……地場衛は、きっと無事です。ご安心なされませ」

「う……ひっくっ。も、もうっ、せ、せっかく、泣き止んだ、のに……！　でも……でも！」

うさぎちゃんは泣きながらも、笑ってくれた。

「ありがとう、景衛さん」

「ところで、クンツァイトらエンディミオン様の側近である四騎士についてじゃが」

再びうさぎちゃんが泣き止むのを待ってから、そういえばと後回しになっていた話題をふる。しかし何故かレイちゃんと亜美ちゃんがビクッと肩をはねさせた。……はて？

「東京タワーで空間がつながった時のぉ。他の三人の気配もなんとな～くじゃが感じたんじゃ。きっとあやつらもクンツァイトと同じく、操られているのじゃろう。しかしクンツァイトはこの間、一瞬正気に戻ったように思えた。もしかしたら正気に戻ったまま、操られたふりをして仲間を助けようとしている可能性もある。と、なればじゃ。次にあやつらがベリルにけし掛けられた時に正気に戻っていればうまくコンタクトをとり、はたまた操られたままなら、うさぎちゃんの力で正気に戻せば心強い味方になる事請け合いじゃ！　うまくすれば敵の拠点や情報がっぽがぽじゃからのお！」

少しでも建設的で、希望のある話を。わしはそう思って、この話をした。

……しかし何故じゃろう。わしが話すにつれて、部屋の空気が重く、お通夜のように暗くなってゆく。

「あ、あの～。参考までに、騎士たちの容姿を教えていただいても？」

引きつった笑みでそう言ったのは、美奈子ちゃんじゃ。

「いや、美奈子ちゃんは覚えておるんじゃないかの？　……まあ、いいですじゃ。えーとですな、前世と同じなら、簡単に言いますとジェダイトは短い金髪の男。ネフライトは

癖のある長い黒髪の男。ゾイサイトも癖のある髪で、こちらは金髪です。よくひとつに結っておりましたなぁ。でもって、クンツァイトはこの間会いましたからいいですな」

側近四人について話していると、ますます空気が重くなっていく。ど、どうしたというんじゃ!?　わし、何か変な事を言ってしまったじゃろうか……。

「ま、まあとにかく。彼らが味方になれば心強い味方に……!」

空気の重さに耐えかねて、わしは口早に言うと茶菓子をつまんで口に運んだ。

その時じゃった。

「すみません。バスで人さらいをしていたので、焼き祓いました……」

青い顔と引きつった表情で手をあげて、そう言ったのはレイちゃん。

「お、女の純情を踏みにじるような卑劣な手段でエナジーを集めてたから、その、雷でドカーンと……」

人差し指を顔の横で伸ばして、ほがらかに笑いながらも大量の汗を流しているまことちゃん。

「う、うさぎちゃんが殺されそうだったから、しかたがなく！　え、えっと……。チェーンでちぎっ……た、倒しちゃいました……！」

テヘペロ、という感じの表情で言う、美奈子ちゃん。こちらもまた、汗が凄い。

……うむ。

「ごっふぅ！　え〝ーっほえ〝ほっ、うぐっ!?」

「きゃあああああ！　ヘリオドール殿!?」

「喉にお菓子を詰まらせたんだ！　うさぎちゃん、掃除機！　早く掃除機を！」

「うんわかった待ってて！　ま、ママー！　ママー！　たいへんよぉー！　今すぐ掃除機出してぇぇぇぇ!!」

数分後、生死の境をさまよったわしは無事にこの世に帰還した。

6じいや，背後のお留守は油断の証

「やっぱり、駄目かのぉ……」
「駄目。あたしたちのプラネットパワーと違って、景衛さんの力は完全な地球由来のものでしょ？　もし万が一があったら困ります」
わしの方が中身も現世の年齢も年上なのに、まるで小さな子供を諌めるように美奈子ちゃんに言われてしまった。
何が駄目なのかというと、わしも月の王国へ連れて行っておくれ、というお願いが却下されたのだ。昔は発達した月の文明によるテクノロジーでムーンキャッスルというドームが作られており、その中では地球と同じような環境を過ごすことが出来た。しかし今やそれも、きっと崩れて跡形もない事だろう。その環境の中でわしが生きるには、セーラー戦士達の持つプラネットパワーの恩恵を受けるしかない。……わしも自然エネルギーを使い魔術を使う事は出来るが、それは先ほど美奈子ちゃんに指摘された通り地球由来のもの。地上から離れてしまえば、使う事は出来ないのだ。そしてそんな中、万が一プラネットパワーの恩恵がわしから一時でも途切れてしまえば、真空の中でわしの命は尽きてしまう事だろう。……それを懸念して、わしの事を心配してくれているの

は分かるのじゃが、ちょっと寂しい。……わしもかの王国が今どうなっておるか、この目で見てみたかったんじゃがなぁ……。

「そうがっかりしないで。心配しなくても、ちゃんと写真くらいとってきてあげるからさ！　月から帰ってきたら忙しくなりそうだし、景衛さんは今のうちにゆっくり体を休めておいてよ」

「そうね。遊びに行くわけじゃないからお土産は無理だけど、それくらいなら……」

「とにかく月の事はあたしたちに任せてくださいね。無理しちゃダメですよ？」

何故だろう。気のせいかもしれんが喉に菓子を詰まらせた後から、まことちゃん、レイちゃん、亜美ちゃんにはまるっきり年寄り扱いされているような……。いや中身がジジイなのは確かなんじゃが、でもこの間のは完全に不意打ち故の誤飲なだけで、別にそう気を使われるような年ではないぞ。わしはまだピッチピチのティーンエイジャーじゃ！

いやまあ、掃除機で菓子を吸い出そうとしたまことちゃんを止めて適切な処置で助けてくれた亜美ちゃんには、しばらく頭が上がりそうにないが……。流石将来医者を目指しているだけあって、素晴らしい手際だったわい。

ちなみにゾイサイトら三人のことについては、仕方がないと思っておる。敵対した相

手に無用の情けをかけることは、自分や仲間の死を招くからのぉ。レイちゃんとまことちゃんに関しては覚醒したばかりの時に相対したというし、むしろそんなすぐに対応できた彼女たちの戦士としてのクレバーさを褒めるべきじゃろう。わしの勝手な感傷で責める事などは出来んわい。

……エンディミオン様にお仕えすることなく亡くなってしまった彼らは気の毒だが、これもまた巡り合わせよ。元凶であるあの化け物と……そしてベリルと決着をつけることで、彼らの無念を晴らすとしよう。……せめて生き残ったクンツァイトだけでも、味方に出来ればよいのだがなぁ……。

しかし、そうなると東京タワーで繋がった異空間からあいつらの気配を感じたのは何故じゃろうか。楽観に過ぎるかもしれんが、もしかしたら生きている可能性もあると……信じてみたいのぉ……。

ともあれ、わしは地球でお留守番じゃ。

その後何日か過ぎ、月へ渡るのは美しき満月の晩となった。

神社の巫女さんでもあるレイちゃんが未来のビジョンを求めるなら満月が良いと言っておったが、わしも全くの同意見じゃ。昔から月の満ち欠けは地球にも影響を及ぼ

しておったらな。わしも予言をするとしたら、決まって選ぶのは満月の晩じゃったわい。

「行ってきます！」

「ああ、行ってらっしゃい。気を付けて」

月へ行く前に振り返って、そう言ってくれたうさぎちゃんにわしも笑って手を振り返す。……何か、あの化け物を倒す手がかりがつかめるといいのじゃが……。

うさぎちゃん達はプラネットパワーで変身する時の力を利用して月へ行くようで、彼女らが円になった場所から月へ昇った光はまっこと美しかった。

わしは彼女たちが天へと昇ってゆく姿を見送ると、冷えた体を一瞬ぶるりと振るわせて公園のベンチに腰かける。そして近くで買ってきた缶コーヒーを開けると、月を見上げながらほのかに温かいそれを喉に流し込んだ。……うむ、美味い。

（東京タワー以来、敵に表立った動きはない……）

それが逆に不気味であった。奴が……あの化け物がエンディミオン様の中へ吸い込まれたと思われる銀水晶の力を吸収したなら、今頃奴は地球を我が物にせんと動き出しているはず。そしてその場合、真っ先に邪魔者であるプリンセスとセーラー戦士を排除

しにかかるはずだ。だとすれば銀水晶の力の回収が出来ていないのか、はたまた……ベリルがあの化け物をも欺いて利用し、自分こそが地球の支配者たらんと、エンディミオン様の存在を奴に隠しているか……。

「ベリル……」

言葉にした名前は、心に重く沈む。

……ベリルの恋心を知った時、わしは真っ先に「その想いは胸の奥深くへ押しとどめよ」と申し付けた。わしの後継者であるベリルは地球国を陰から支える事はあっても、王妃としてエンディミオン様の隣に立つことは叶わぬ。そう思い、わしは自分の身勝手な感情でベリルを縛り付けてしまったのじゃ。思えばそれが、よりベリルの恋情を肥大化させる原因になっていたやもしれぬ。

そんな時、ベリルが陰からエンディミオン様をお慕いする中……エンディミオン様とセレニティ様は出会い、恋に落ちた。

わしは、お二人の恋こそ真っ先に戒めるべきだったのかもしれぬな……。

もとより、地球人と月の住人は寿命が違う。そんな二人が恋に落ちれば、化け物の事がなかろうと、結果として悲しい恋に終わる事など容易に想像できた。どんなに幸せであっても、時の流れという覆せぬ隔たりがいつしか二人を別れさせたはず。それを思うと同じ寿命をもった同じ種族にお二人が生まれ変わったのは運命ともいえるが……そ

の前に彼らが味わった悲劇を思えば、それはあまりにも都合の良い解釈というものじゃ。

もしわしがベリルの心を理解していたら。もしエンディミオン様とセレニティ様の恋を良しとせず、同じ地球人であるベリルとの仲を応援していたら。もしあの化け物を、わしだけでなんとか出来ていたのなら。

都合の良いもしもが、誰もが傷つかない世界があったかもしれないと夢想させる。……たわ言じゃ。まったくもって、戯言じゃ。

もしベリルが化け物に付け込まれなくとも、いずれは誰ぞが憑りつかれベリルの役目を果たしていた。だからこそこれは、弟子の心を踏みにじったクソジジイのくだらない感傷にすぎん。

「ああ、わしは……格好悪いのぉ……」

わしの力ないつぶやきは、夜のしじまに落ちて消えた。

うさぎちゃん達が無事に月から帰ると、彼女たちは月のホストコンピューターに残っていたクイーンセレニティ……プリンセスセレニティのお母上の意識と会話をし、伝説の聖剣を賜ってきていた。しかしその聖剣とやらは、見れば石で出来た無骨な物じゃ。失礼ながら、少々神聖さに欠ける。

そして期待していた敵の居場所については、残念ながら月からも正確な位置は把握できていなかった。地中奥深くで蠢いておるとのことじゃが、これについてはルナ殿とアルテミス殿がコールドスリープから目覚めてから集めていた、地球上全ての地殻変動及び気象観測データをもとに多少のめぼしはつけているとのこと。う～む。月のテクノロジー様様じゃのぉ……。わしも昔ほどの力があれば地球全ての地脈を探り場所程度なら割り出せたかもしれんが、それも体の経験が乏しい今は少々難しい。というか、それをやれたとしても昔と同じ轍を踏むだけじゃ。汚染された化け物のエナジーでも取り込もうものなら、また何も出来ずポックリ逝ってしまうわい。

あとあの化け物を倒すには、やはりうさぎちゃんが幻の銀水晶の真のパワーを引き出すしかないようじゃ。そしてきっと、そのためにはエンディミオン様の救出も不可欠

……。

「ふむ。では、どうしますかな？　敵の本拠地に目星をつけてしらみつぶしに攻め込むか、それともまず敵側の動きを待つか」

「……あたしは、早くまもちゃんを助けたい。あのね、前世のママに言われたの。強い信念と愛情があれば、きっとあの悪魔は消し去れるって。あたしはプリンセスであると同時に正義の戦士セーラームーンだから、自信をもってって。それと……あたしは一人の女の子で、生まれ変わった本当の意味もそこにあるのを、忘れないでって……」

わしの言葉に、うさぎちゃんがとつとつと語る。そしてふいにわしを真っすぐに見つめた。

「だから、悲しまないで戦うの！　プリンセスでもセーラームーンでも、そうである前にあたしは月野うさぎっていう、恋する女の子！　恋する女の子は、強いのよ。だからあたしを恋する女の子にしてくれたまもちゃんを、エンディミオンを絶対に助け出す！　そうすればきっと、こう、すっごいパワーがわいてきて、幻の銀水晶の力だって引き出せると思うわ！」

ぐっと力拳を作ってそう言ったうさぎちゃんは、うっすら滲んだ涙をぐいっとぬぐう。

「力を貸して景衛さん！　あたし、頑張るから……！」

「こ、心意気は受け取りました！　もちろんですぞ！　わしはもとより助力を惜しみませぬし、逆に我が主を助けるために力を借りる身でもあります。共にエンディミオン様を助け出しましょう！」

ぐいぐいと意気込みよろしくわしの近くによってきたうさぎちゃんの気迫に押されつつも、わしも握り拳を作ってその熱い想いに応える。そして二人して「えいえい、おー！」っと気合いを入れ……そして再度訊ねた。

「で、攻め込むのと待つのはどっちにしますのじゃ？」

「！　敵よ！　街が氷漬けにされているわ！」

「タイミング！」

気合いを入れたわしらの空気でも読んだのか、まさかのタイミングで敵の襲来じゃった。

東京の街を氷漬けにしていたのは、クンツァイトじゃった。現場に駆け付けたわしとセーラー戦士を前に、クンツァイトは居丈高に言い放った。

「遅いぞセーラームーン！　いや、プリンセス！」

「東京を北極にでもするつもり!?」
「そうとも！　我が大いなる支配者がいつ復活してもいいようにな！」
むう、この調子じゃあ、ま～た操られておるのぉ……。さて。
「そうはさせない！　ムーンヒーリング　エスカレーション!!」
うさぎちゃんの凛々しい声と共に、癒しの光が東京中を凍り付かせていた氷を溶かして人々を癒す。相変わらず、凄まじいエナジーじゃ。もしわしがこれと同じことをすれば、あっという間に干からびてしまうじゃろう。力を貸すことに異存はないが、こうも彼女たちの力を目の当たりにすると地力の差を思い知らされるのぉ……。見たところクンツァイトも、あの化け物……大いなる支配者とやらの力なのか、やたらとパワーアップしているようじゃし……。

ま、わしはわしに出来る事をするまでよ。
まんまと出てきおって。おびき出したつもりじゃろうが、飛んで火に居る虫は貴様じゃわい！

「ほーりゃ！」
「なぐはっ!?」
わしがしたことなど簡単じゃ。
わしはうさぎちゃん達に気をとられ背後がお留守になっているクンツァイトに気配を消したまま近づいて、昏倒の術を施した杖でクンツァイトの頭をスコーンと打ち抜いたのじゃ。馬鹿め！　騎士たるもの全方向に気を配らんかい！　そして敵の伏兵も警戒せんとは愚かの極み！　ほ～れ、簡単に気絶しおった。今のわしとて事前に準備を整えておけば、これくらい！
「……ん？」
……何故じゃろうなぁ……。何故かクンツァイトの体が、さらさらと砂のように崩れて……。
わしらが見守る中、クンツァイトは一粒の宝石になってカツーンっと地面に落ちた。
沈黙が落ちる。
「ヘリオドール殿……」
「ち、違う！　違うぞ亜美ちゃん！　わしは気絶させるための術しか施しておらなんだ

！」

わしが言い訳のように弁解しておると、ふとクンツァイトの宝石が落ちたあたりを見れば空間に歪みが生じておる。いかん!!

「もっていかせるかぁぁぁぁーーーー!!」

寸前で、わしは空間の歪みに宝石が飲み込まれる前にそれをキャッチすることに成功した。ジジイ渾身のスライディングキャッチじゃ！

そして実際に宝石を手にすれば、何故クンツァイトが宝石になってしまったのか理解できた。

「なんと……！　人の身から作り変えられ変異させられておったか……！　どうやら今のわしの魔術が変に作用して、体を維持するために残っていたパワーを弾き飛ばしてしまったようじゃの」

「そんな……！　操られるだけでなく、人でなくなっていたというの!?」

ショックを受けたように、前世で多少クンツァイトと交流があった美奈子ちゃんが口元を押さえる。しかし、事態は悲観するだけでもない。

『う……』

「ご安心めされよ。どうやら体は維持できなくとも、クンツァイトの魂は未だこの中にある」

こうして形はどうあれ、わしらは初めて敵の情報源を手にすることができたのじゃった。

7じいや，希望を抱いてメイクアップを叫ぶのさ！

『か、か～わい～い!!』

それが、わしが宝石から具現化したクンツァイトへ向けられた女性陣の第一声であった。

あの後クンツァイトの現在の肉体であり中核でもある宝石を手に、わしたちはクラウンの地下にある指令室に戻った。そしてよくよく宝石を見れば、肉体を形成する術の他に、こやつを操るための術までほころびかけているではないか。これ幸いと、わしは喜々として解呪に取り掛かった。これまであまり役に立てておらんからな。ここで宮廷魔術師としての名誉挽回じゃ！

そして時間がかかるため少女たちは先に家へと帰して、わしは夜通しの作業でクンツァイトを縛る術を解いていった。そしてそれが完了したのが今朝方であり、うさぎちゃんたちが学校から帰って来るまで（あんな戦いの後だというのにちゃんと学校に行くうさぎちゃん達は学生の鏡じゃあ！）わしは仮眠をとって待つことにした。そして先ほど「ヘリオドール様。ヘリオドール様！」とクンツァイトに起こされ、ちょうどうさ

ぎちゃん達も来て今に至る。
うさぎちゃん達はわしの横に……というより、肩にのっかるクンツァイトを見て驚いたようだが、敵であったこともひとまず忘れることにしたのか、見事な五重奏でもって「可愛い」と彼を称した。
……クンツァイト……。今、手のひらサイズじゃからなぁ……。

とりあえず席に着き、お茶を淹れて茶菓子も広げたところで一息。その間終始、少女たちの好奇の視線にさらされたクンツァイトは居心地悪そうにしておった。
「え、え～っと、ごほん。とりあえず、今の彼の姿について聞いてもいいですか？」
話を切り出したのは、セーラー戦士達のリーダーである美奈子ちゃんじゃ。クンツァイトも彼女とは少々交流があったためか、美奈子ちゃんをチラチラと横目で窺っている。
「ああ、実はのぉ。わしの術で肉体を形成してみたんじゃが、どうにも出力不足なのか、こんな不十分な姿になってしまったんじゃ」
「いえ、ヘリオドール様のせいではありません。もともと、この核にも限界がきておりました。すでに成人男性の体を形成するほどの、多くのエナジーを止めておく力がないの

です」

　わしの説明に対し、クンツァイトはそんなことを言った。まあそれも事実ではあるじゃろうが……何にせよ、折角洗脳から解放されたというのにこんな姿とは申し訳ない。

「あの、クンツァイト……さん？　あなたはベリルに洗脳されていて、今はそれが解けたと思って、いいんですよね？」

「ええ、マーキュリー殿。……皆様方には、とんだ醜態を晒してしまいました。もし可能なら、この命を絶って償いたいほどの愚行です」

「いいって、そういうのは。一人でも味方が増えてくれるんなら嬉しいよ。……あんたの仲間を倒しちゃったのは、申し訳ないけど」

「そのような！　申し訳ないなどおっしゃらないでください、ジュピター殿。我らが不甲斐なかったのです。もっと早くに記憶を取り戻せていれば、ベリルに利用されることも無かっただろうに……。無念です」

「……あ、あの！　エンディミオンは……まもちゃんは、無事？」

　自責の念に駆られているクンツァイトであったが、うさぎちゃんの質問にはっとしたような表情をしたあと、背筋を伸ばし居住まいを正した。ちなみに余談であるが、クンツァイトには今ティッシュケースに座ってもらっている。……他にいいものがなかっ

たんじゃ。
　そしてクンツァイトは言おうか言うまいか逡巡したようだが、わしが頷くのを見ると覚悟を決めたようで事実を話す。……わしも聞いた時はショックじゃったが、隠し立てしても始まらぬ。情報を共有し、一刻も早く対策を練るのじゃ。
「生きておられます。ただ……」
「ただ？」
「極端に生命活動が低下しており、……意識が、戻らないのです……」
　その言葉にうさぎちゃんは目を見開くが、そこにわしが捕捉をする。
「しかし生命活動が低下しているというのは、本人が無意識に行っていることかもしれん」
「と、いうと？」
「……東京タワーでエンディミオン様は、幻の銀水晶の光を受けるまで生命活動が完全に停止しているように見えた。しかし、あの光が体に吸い込まれた後は、確かに命の鼓動を刻んでおられたのですじゃ」
「……もしかして景衛さんが言いたいのは、一度生命の危機にさらされたから、体が無意識のうちに生命活動を最低限まで鎮静化させて、そのなかで静かに回復を進めているかもしれない。……と、いうこと？」

「おお！　そうですじゃ、そうですじゃ。レイちゃんが今言った事を言いたかったんじゃわしは！　とにかく、あれほどのエナジーを一身にうけたのじゃ。回復しないことなどまずありえんが、強大な力が体になじまない場合もある。きっとエナジーを身に取り込みながら、ゆっくり回復しているに違いない」

しかし、わしの推測を聞いてもクンツァイトの表情は晴れない。

「それならば、よいのですが……。ですがベリルがいくら探そうと、エンディミオン様の体に銀水晶の力は見受けられなかったと……」

「しかし、お亡くなりになられてはいないのじゃ。今はエンディミオン様の無事を信じ、救出することが先決。そして回復が不十分なら、うさぎちゃんが直接治癒を施してやればよかろう。とにもかくにも、エンディミオン様を救い出さねば始まらん」

と、いうわけで。

クンツァイトに視線が集中する。

「おぬしが知っておるダークキングダムの情報。そしてあの化け物について。……話してくれるな？」

クンツァイトの情報提供により、ダークキングダムの拠点は分かった。そして敵の化け物……クイン・メタリアのことも。

どうやらダークキングダムは北極圏にあるらしく、捧げられたエナジーでクイン・メタリアはかなり実体化を進めているらしい。

本音を言えばすぐにでも攻め込みたいところじゃが、相手はあの巨悪。いくらうさぎちゃんが意気込もうと、何の対策も無しに攻め込むのは危険じゃ。

そういうわけでわしらは、月の王国より持ち帰った聖剣の解析を進め、その力と使い方を明確にしてから敵の本拠地に行く事を決めた。……焦って返り討ちにあっては、元も子もないからのぉ……。

クイーンセレニティがわざわざ戦士達に託したのだ。きっと聖剣に、クイン・メタリアを封印する秘策があるはず。……贅沢を言えば、その使い方も教えてくれたらよかったんじゃけどなぁ……。でも下手したら数万年ぶりに会う娘に対して、クイーンも話したいことがたくさんあったじゃろうし……責められんわい。

解析には戦士達のブレーンであるマーキュリーこと亜美ちゃん、そしてルナ殿、アル

テミス殿、わし、クンツァイトが中心となって行う事になった。メインは亜美ちゃんで、わしらは彼女を手伝い、彼女が学校に行っている間はわしらがその解析を引き継いで調査を進める。わしだけ学校を休んで指令室に缶詰めになることに最初彼女は渋ったが、そこはわしが譲らなかった。

少女たちには現世の生活がある。

前世の因縁に決着をつけるのも大事じゃが、今の生を大事にもしてもらいたいのじゃ。わしはまあ、ちょっとやそっと休んだくらいで揺らぐ成績でも無いし、最悪留年したって問題ない。まだまだ人生長いからのぅ。

決め手に「エンディミオン様の配下であった我らに、他の三人の分も働かせてくだされ」と言ったら諦めてくれた。ちょっとずるかったかもしれんが、ここは納得してもらわねば。

そして解析を続けていた、ある日の事。

現状で分かった結果を皆様方に知らせるために、亜美ちゃんのご自宅へお邪魔するこ

とになった。
「わあああ！　亜美ちゃんちって、すっごいマンション！」
「違うようさぎ……。これは億ションてゆーんだよ……」
「へー！　まこちゃん物知りー！」
　驚いた様子の四人に同じく、わしもたいそう立派な建築物を前に感嘆の息をこぼす。なんとまあ、凄いお家に住んでいるものじゃ……！
　そして招かれた家の中で、美奈子ちゃんが代表して持ってきていた石の剣を取り出す。……来る途中でうっかり剣を床に落として大理石を傷つけておったが、しっかり者に見えて実はちょ～っとおっちょこちょいじゃなぁ美奈子ちゃん。わしのパーカーのフードに隠れていたクンツァイトにクスクス笑われて顔を真っ赤にしていたのは可愛かったが。

　しかし、件の石の剣は美奈子ちゃんのように可愛いものではない。なにしろ大理石どころか、数ある鉱石の中でも最大の硬度を持つダイヤモンドすら薄いガラス細工のように砕いてしまうのだから。

「……それで、この石の剣なんだけどね？　月から持ち帰った石化した神殿周囲の物質

と、同じ成分が確認できたの。とても強固で特殊で……そして、毒性の強い成分だわ。でもこの剣も神殿も、その物質そのもので出来ているんじゃない。いわば、固められているといっていいわね」
「固められている？」
「本体の周りを、その毒性の強い物質がコーティングしておるんじゃ。リンゴ飴みたいにのぉ。……そしてこれは、おそらくかつて地球に現れた石柱（モノリス）と同質のもの。おそらく暗黒の雲と共にどんどん増えていった石柱は、もとは草木や動物、人間だったのだろうよ。この剣と同じように石に包まれて石柱化したんじゃ」
「そんな、むごい事が……」
　レイちゃんが悲痛そうに顔を歪め、剣を見る。
　……たしかに、むごいのぉ……。石に包まれた動物や人間は窒息死したのか、それとも毒に蝕まれて死んだのか……。メタリアめ……！
「で、じゃ。つまりこの剣も、もとはこんな姿では無かった。きっと聖剣に相応しい姿をしておったことだろう」
「そう。そしてあたし達がこの剣を使うためには、まずこの石化の呪いをどうにかしないといけないわ」
「これを、もとの姿に戻すって事か……」

「……これを？」

わしと亜美ちゃんの言葉に、まことちゃんとうさぎちゃんがつんつんと剣をつつく。

これこれ、突いている場合じゃないぞい。

「うさぎちゃんや。きっとこれを元に戻せるのは、浄化の力を持ったセーラームーンだけじゃ」

「あ、あたし？」

「うむ！　じゃな？　クンツァイト」

「はい。おそらくクイン・メタリアの邪悪な力に対抗できるのは、貴女だけです。今までも我々の仕掛けた力を打ち破ってきたでしょう？　我らが操っていたのは、クイン・メタリアから与えられた力の片鱗。つまりそれを浄化し、人々を癒したあなたなら……。きっとこれも、どうにかできる」

「おうとも！　と、いうわけで。変身するのじゃうさぎちゃん！」

「今ここで!?」

「そうじゃ！　これもエンディミオン様を助けるため！　わしも魔術方面から出来るだけサポートしますゆえ！　さあ！　さあ！」

わしがずずいと迫ると、うさぎちゃんはビックリしながらも力強く頷いてくれた。

「まもちゃんを助けるためよ！　あたし、頑張っちゃうわ！」

「おお！　さすがはプリンセスじゃ！　ご立派ですぞ！　凄いですぞ！」
「そ、そう？　えへへ……」
「いよ！　未来のクイーン！　麗しの勇敢で美しいプリンセス！」
「またまたぁ、そんなぁ〜」
「よーっし！　では、せーのっ。で変身ですじゃ。せーのっ」
「ムーンプリズムパワー！　メーイク、あーっぷ!!」
「なんか、最近景衛さんとうさぎちゃんが熱血コーチとスポーツ選手に見えるわ……」
「うん。ちょっと違う気もするけど、なんとなく分かるかも……」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

うさぎ達が亜美の家に集まっている時。
時を同じくして、ゲームセンタークラウンに一人の青年が現れた。
「セーラームーンに、幻の銀水晶……」
そこに居たのは、攫われたはずのタキシード仮面。
エンディミオン王子……地場衛の姿だった。

８じいや，飛んで火に入る王子なりけり～そして始まるダルシムＶＳザンギエフ

聖剣を元の姿に戻すためにうさぎちゃんに頑張ってもらい、わしも出来る限りサポートして、セーラー戦士の皆様方も変身の力をうさぎちゃんに注ぎ込んで、クンツァイトは今何も出来ない状態なので「が、頑張ってください！」と小さい体で精一杯応援して、小一時間。

全員でぜ～は～と息をつきつつ、ほんの先っぽだけ美しい銀色の輝きを取り戻した聖剣を見た。

「と、とりあえず……。この聖剣が、幻の銀水晶で出来たものってことは、分かったわね……」

「こ、これは頼もしいや……。へへっ……。はぁ……」

「さ、流石に疲れたわね……。でもこれ、まだ先っぽよ？　あとどれくらいで、元に戻るのかしら……」

「ううっ、みんなごめんねぇ……。あたしがもっと頑張れてれば……」

「うさぎちゃんのせいじゃないわっ。で、でも今日は流石にここまでね。みんな干から

びちゃったら元も子もないわ……。いつ敵が動くかも分からないし、消耗しきってちゃお話にならないもの……」

亜美ちゃん、まことちゃん、レイちゃん、うさぎちゃん、美奈子ちゃん。みんなお疲れのご様子じゃ。これはわしが皆様方の頑張りをねぎらうべく、お茶でも用意を……！

「ヘリオドール様。あなたも頑張り過ぎです」

「ぐ、ぐう……！　わしゃあ大丈夫じゃわい……！　ぬお!?　こ、腰が……！」

無様にも床にぺっとり横たわるわしの横にクンツァイトがしゃがみこんで、心配そうな表情で覗き込んでくる。

くっ、心配してくれるのはありがたいが、そんな哀れみの目で見るでないわい!!　これは術の行使の負担が何故か腰に集中してしまっただけなんじゃ！　しかし何故腰に！　く、くっそう。これではまるで、体までジジイのようではないか！　情けないぞ、わしのティーンエイジャーぼでぃーよ……！

その後しばらく休憩して、とりあえず今日は解散、という事になった。美奈子ちゃんが言う通り、消耗しきっていざという時動けないというのでは危険だからのぉ。いやはや、まったくもって頑固な油汚れどころじゃない強力さじゃ、あの石め。忌々しい。

「では、家の方向が同じじゃからうさぎちゃんはわしが送っていこう。もう夕方だし

のぉ」

そう言って、わしは自転車の後ろにうさぎちゃんを乗せて（腰はもう若者の意地的な気合いで治したわい！）家路についた。

そして帰宅の途中。

後ろに乗っているうさぎちゃんが、ふいにぽつりと言葉をこぼした。

「綺麗な夕日だね。……あの人の部屋の窓から見えた夕日も、こんな感じだったな」

「なんと！　う、うさぎちゃんはエンディミオン様のお部屋に行ったことがあるので!?　お、お二人の仲はもちろん応援しますが、うさぎちゃんはまた中学生！　異性の部屋に簡単に入ってはいけませぬぞ！」

「そ、そういうんじゃなくて！　気を失っちゃったときに、助けてもらったの！　その時にまもちゃんがタキシード仮面様だって知ったのよ」

「そうだったのですか……」

「……今朝ね。まもちゃんにそっくりな後姿を見たの。そしたら今日一日、色々考えちゃって」

……わしが無理に励ましてしまったから、気丈に振る舞ってくれておったんじゃな

……。今ぽつぽつ言葉を紡ぐうさぎちゃんは、年相応に幼く儚げに見える。きっと内心心細くてかなわんのだろう。

……よし！

「うさぎちゃんや、ちょっと寄り道していきませんかの？」
「え？」
「いっちょスカっとゲームでもしようではありませんか！」
「！　いいの!?　実はあたしも思いっきりゲームしたいと思ってたの！」
「もちろんですじゃ！　ふっふっふ。わしのダルシムが火を噴きますぞい！　学校の男友達をつきあわせてかなり練習しましたからな！」
「あたしの春麗だって負けないもん！　あ、でもその前にセーラーVゲームやりたいなぁ！」
「な、なんと！　むう、わしはあれ苦手ですじゃ……」
「大丈夫大丈夫！　あたしがちゃんと教えてあげるから！」
　そう言ってバシバシわしの背中を叩くうさぎちゃん。ふふっ、少しでも元気が出たのならよかったですわい。

……と、所でうさぎちゃんや。今叩いてるパーカーのフードのあたりなんじゃが……。

「……」

「きゃあ!?　そういえばクンツァイトさんそこにいたんだった!?　小さいからつい忘れてて……！　ご、ごめんなさぁ～い！」

星を飛ばしてきゅうとのびたクンツァイトに気づいて、うさぎちゃんが慌てる。わしはクンツァイトには悪いがそれに思わず大笑いしてしまった。そして勢いよく、ペダルをこぐ足に力をいれる。

「さあ、行きますぞ。目指すはゲームセンタークラウンですじゃ～！」

こうしてわしとうさぎちゃんはクラウンにやってきたのじゃが、来て早々ポカンとすることになった。

「やあ、うさぎちゃん」

これはいつものゲーセンのお兄さんじゃ。しかし問題は、その隣に居る青年。

「きみが、うさぎちゃん？　セーラームーンと、同じお団子頭なんだね。流行っているのかな？」

そう言ってキザッたらしくうさぎちゃんの髪に触れるのは、どう見ても地場衛。エンディミオン様である。しかしその振る舞いは馴れ馴れしいが、その言動はまるで初対面のようだ。

疑問に思ってゲーセンのお兄さんを見ると、彼がエンディミオン様（仮）を紹介してくれた。

「こいつは新しくバイトに入った、オレの親友の遠藤だよ」

「古幡と同じＫＯ大学の一年、遠藤です。よろしく。……ところで、きみはセーラーＶゲームがとてもうまいんだってね。よかったら教えてくれないか？　うさぎちゃんにお願いしたいん……な、なんだ？」

わしはぽやっとエンディミオン様……遠藤を名乗る男を見ているうさぎちゃんとの間に割り込むと、身をかがめて下のアングルから眉間に皺を寄せつつ遠藤を観察する。

そしてがしっとその頬を両手で挟んだ。

「景衛さん!?」

「な、何をするんだいきなり！」

驚く周囲を無視し、わしはそのまま頭から足の先まで一気に遠藤の体をまさぐる。そ

してポケットから取り出したメジャーで身長、胸囲、腰回りなどなどを瞬時に測定する。遠藤が顔を青くしてゾワゾワしているのは目に見えて分かったが、構うもんかい。

そして全てが終わり、ふむ、と一息。

骨格も体格もまず間違いなく、エンディミオン様じゃわい!!　そもそもよく似た別人がこんなタイミングで都合よく現れるか!!

しかしこんな様子でこの場に居るという事は、もしかしなくとも操られておる！　そしてきっとクンツァイト達と同じく、クイン・メタリアの力を授かって送り込まれた可能性も大!!　わしの手には余る……しかしこのチャンス、逃してなるものか!!

「いや失礼！　あまりにも素晴らしいスタイルでしたので、思わず測定してしまいました！　これはわ……俺の癖でしてな！　将来はデザイナーを目指しているので、素晴ら

しい体格の人を見るとこうせずにはいられないんです！　さてちょいと俺はお手洗いを借りようか！　さっきから尿道が爆発しそうで我慢していたんだ！　う、うさぎちゃんもほれ、おしっこ我慢しとったと言っていたじゃ……だろ。早くお手洗いへ行かないと！」

「えっ、えっ!?　ちょ、ちょっと景衛さん、適当な事言わないで！　お、おおおおしっこ我慢なんてしてないわよ！」

「いいから！」

顔を真っ赤にして憤慨するうさぎちゃんの腕をひっぱって、とりあえず遠藤を名乗るエンディミオン様から引き離す。そしてルナ殿から借り受けた通信機を取り出すと、セーラー戦士達に緊急招集をかけた。

「緊急事態発生！　緊急事態発生!!　現在ゲームセンタークラウンにて操られている様子のエンディミオン様発見！　ただちに確保するため包囲網を作ってくだされ！　わしは包囲網完成次第、ホシの確保に移行する！」

「やっぱりあれ、まもちゃんなの!?」

「そうですじゃ！　さて、戻ってわしらは足止めに努めましょうぞ。お望み通りゲームを教えてやって、他の皆様方が来るまで時間をかせぐのじゃ！」

飛んで火に入る虫第二弾じゃ！　ベリルめ、操っていることで調子に乗りおって詰めがハニートーストに生クリーム増し増しでイチゴジャムをぶっかけたくらい甘いわ！
……例えておいてなんだが普通に美味そうじゃな……じゃなくて、とにかく甘いわ！
わしが王子を見つけておいて逃がすと思うなよ。

「いやぁ、お待たせしました！　何しろ大まで出たもんで。スッキリスッキリ」
「景衛さん下品！　あ、あの！　あたしは違いますからね！　ちょっと髪の毛なおしてたから遅くなっただけで！」
とりあえず、わしらは出来るだけ不信がられないようにお兄さんとエンディミオン様のもとへ戻った。ふふっ、我ながら演技派じゃわい。
しかしわしらの思惑とは裏腹に、エンディミオン様は冷たい目ですうっと目を細める。
「……今日は、バイト初日なんでちょっと早めに帰らせてもらおうかな。うさぎちゃん、またね」
そう言って、うさぎちゃんのおとがいに指をかけて視線を合わせて言う遠藤化エンディミオン様。ぐ、ぐおぉ……！　エンディミオン様のはずなのに、エンディミオン様

のはずなのにいい!!　いちいち行動が鳥肌たつわい！　くっそうベリルめ、エンディミオン様に妙な術をかけおってからに！

しかしうさぎちゃんよ、ぽおっとしている場合ではありませんぞ！

「まあまあ、そう急がずともいいだろう！　どうだ？　俺で良ければゲームを教えてやろう。セーラーVでなくて申し訳ないが、俺のダルシムは強いぞ！　……まさか男がストツーの対戦を申し込まれて、逃げる事などしないだろう？」

そう言って挑発的に笑むと、ピクリとエンディミオン様の眉が動く。

「……いいだろう。ただし、一戦だけだ」

「望むところよ」

その後、わしのダルシムがエンディミオン様のザンギエフにぼろ負けした。

馬鹿なぁ!!!!

9じいや，ヘリオドール（イエローベリル）

わしのダルシムをボッコボコにしてくれたエンディミオン様に戦慄しつつも、その後もなんとかなだめすかし、最終的にうさぎちゃんにセーラーVゲームで引き留めてもらう事になった。

操られているエンディミオン様も、もとからそのつもりのようじゃからな。……もしや、このゲームが地下の司令室の入り口であることも気づいておるかもしれんの。それと、うさぎちゃんから直接幻の銀水晶の在処を聞き出すつもりか。

「！　エンディミ、ふぐ!?」

そしてしばらくすると、気絶していたクンツァイトが目覚めたので慌てて口を塞ぐ。

「しーっ。ちょっと静かにしておいてくれ。今のエンディミオン様は操られておる！今戦士の皆様がこちらに向かっておるから、包囲して確実にエンディミオン様を確保するんじゃ！」

「そ、そうでしたか。……おや、あの青年もしや……」

「ゲーセンの兄ちゃんか。ああ。エンディミオン様の事を同じ大学のご学友だと思わされている。きっと催眠術か何かだろう」

そう。今エンディミオン様の隣にいるあのお兄さんも、助けなければいかん。
幸い現在ゲームセンターに他の客は居ないから、隙を見計らって彼を気絶させなければ。このままだと巻き込みかねん。
『景衛さん！　みんな到着したわ』
「！　わかりました。では、周囲に人払いの結界を作ってくだされ。ゲームセンターの中に今居るのは、わしらだけですじゃ」
通信機に連絡が入ったので、わしもすぐに動けるように体勢を整える。

……に、しても。

「やっぱりうまいんだな、君は。まるでVと一心同体。Vを知り尽くしているみたいだね」
「え、ええ。そうよ。力強い味方だもん……」
「ふふっ。会った事あるみたいな言い方、だね。実は俺も見た事あるんだ」
「ほうほう！　あの正義の味方セーラーVに!?　俺も是非とも話をお聞きしたいな！」
いつの間にかうさぎちゃんに暗示をかけようとしているエンディミオン様の前に、ぐいっと割って入る。

「そ、そうか。でも後にしてくれないか？　俺は今、うさぎちゃんと話しているんだが……」
「いやいや、そうつれない事を言わずに！」
　エンディミオン様の肩に置かれたわしの手と、わしをどかそうと笑顔のまま力を籠めるエンディミオン様の力がギリギリ拮抗する。
「ははははは……」
「ふふふふふ……」
　そのまま、しばらく。
「はあ！」
「!?」
　エンディミオン様の頭部を、美奈子ちゃん……噂のセーラーVたるヴィーナス殿のおみ足が打ち抜いた。
「力技すぎるよ美奈子ちゃん!?」
「いいえ、これくらい強めにいかないと！　先手必勝！　過去の大敗北があるんだもの。王子には悪いけど、ちょっと痛い目みてもらうわ！　本人と分かっているなら話が早い！　捕獲一択よ！　さあ、亜美ちゃん！」
「まかせて！　ここ数日、剣の解析と共にルナと景衛さんとで作り上げた、これを使う時

が来たのね！」

「投げるよ！　はあっ」

愛しの君がいきなり飛び蹴りで吹っ飛ばされたことにうさぎちゃんがうろたえるが、セーラー戦士達は着々と捕獲作業を進める。なんとも頼もしい。

そしてまことちゃんがわしとルナ殿、亜美ちゃんで共同開発した、万が一に備えての新アイテム。……超特殊素材で出来た、投網がエンディミオン様に投げかけられた。

ちなみに亜美ちゃんだからって網を用意したわけじゃないぞい。

そしてゲーセンの古幡お兄さんはレイちゃんがすでに気絶させている。は、早いのぉ。

「な、なんだこれは!?」

エンディミオン様は何やら念力のようなもので投網に抗うが、そう簡単にその投網はやぶれまい。何と言ったって、わしが特別な仕掛けを施しておる。

わしは魔術を使う際に地脈からエネルギーを借り受けるが、今はその逆。投網にアースのような役目をもたせて、特殊な力を浴びた場合それを地脈に逃がしてやることが出来るのだ！　フハハハハ！　これでどんなに強い力だろうと、早々には破れんわい！

「さあうさぎちゃん！　変身して、幻の銀水晶の力でエンディミオン様を正気にもどしてこちらに呼び戻すんじゃ！」

「う、うん！　わかった！」
　最初は混乱していたうさぎちゃんも、きりっとした表情で頷くと胸元からペンダントに加工された銀水晶を取り出す。

　その時じゃった。

「もらったぁぁぁぁ!!」
「きゃあ!?」
「なんだと!?」
　突如として前触れなく、うさぎちゃんの前に赤髪の女が現れた。そしてうさぎちゃんから、凄い勢いで銀水晶をむしり取る。
　その女を、わしが見間違えるはずもない。
「ベリル！」
「くう！　役立たずめ！　送り込んで早々にまんまと敵に捕まるとはどういうことだ！
　……まあいい。こうして幻の銀水晶は、わが手におちた」

「……そんな力技で自分から奪いに来るなら、初めから妙な小細工をせねばよいものを」
「黙れジジイ!!」
「誰がジジイじゃ！　見よ、このぴっちぴちな十代の体を！　今のお主より若いわい！」
「やかましいわ!!」
　ゲームセンター内に現れたドレス姿のベリルはかなり浮いておるが、これはまずい。ゲーセンの周囲にはセーラー戦士達の結界が張られていたはず。それを力技で突破したとなると、ベリルの力は相当なものじゃ。メタリアにかなりの力を与えられていると見た。
「……ともかく、メタリア様のお力で蘇り、ダークキングダム最強の戦士となった王子は返してもらうぞ」
「最強の戦士？　投網につかまってるけど……」
　冷静にレイちゃんが投網の中でうごうごともがいているエンディミオン様を見てつっこむが、ベリルはそれを無視することにしたらしい。それどころかわしまで完無視じゃ。こ、こやつめ。
「待って！　まもちゃんを連れてなんて、いかせない！」
「くくっ。プリンセスか。……何度会っても、もろく幼い小娘だこと。泣いているの？」

目に涙を浮かべて叫ぶうさぎちゃんを見て、ベリルがあざ笑う。そして高らかに名乗りをあげた。
「我が名はダークキングダム女王、クイン・ベリル!!　プリンセス・セレニティよ。愛しの王子に殺されるなら本望であろう?　さあエンディミオンよ!　我が伴侶となる者よ!　今こそその力を解放し、セーラー戦士を屠り、プリンセスを亡き者とするのだ!」
言うなり、ベリルに投網が引きちぎられる。しまった、あれは外からの力には弱い!
そしてエンディミオン様が解放されるなり、周囲に強烈な暴風が渦巻いた。いかん、このままではゲーセンが吹っ飛んでしまう。
「ルナ、時間軸の計算を!　超次元空間のシールドを作って、この場を隔離するわ!」
「!　わかったわ!」
真っ先にそれに対応したのは亜美ちゃんで、それに伴い周囲は暗い空間へと変異する。亜空間へと場所を移したのだろう。
「くくっ、何処で戦っても同じことよ」
「ベリル!　エンディミオン様を返せ!」
「おお、クンツァイトか。本体が戻らぬから核ごと朽ちたかと思ったが、まさかそのような惨めな姿で落ちのびていたとはな。これはお笑いだ」
「くっ」

わしの肩口に必死で風に飛ばされないようにくっついているクンツァイトが、悔しそうに顔を歪める。……それにしても、さっきから勝手な事を！

「ベリルよ！　我が弟子よ！　……お前の相手は、わしがする」

「……はっ。貴様が？　ヘリオドールよ。私はもう、かつての無力な小娘だったベリルではない。今や貴様の力を大きく超えているのだ！」

「あの化け物にもらった力じゃろうが！　喜べ、わし直々にデトックスしてくれる！」

「戯言を。では望み通り、貴様からまず葬ってやろう！」

「ヘリオドール殿！」

エンディミオン様がセーラー戦士と相対する中、わしはベリルの前に立ちふさがった。こ奴を止めるのは、師であるわしの役目じゃからな。

……じゃが、もし叶うのなら……。

「死ね!!」

「ふっ、くぁ！」

一瞬気がそれたところに、ベリルの髪の毛がわしの首に巻き付いてくる。窒息死させる気か！

わしはすぐさま常備していた伸縮性の杖（消費税３％税込み５０１５円）を取り出すと、断絶の風の刃を纏わせて振り下ろす。しかしうねる髪の毛はその斬撃をいなし、とても切れそうにない。

「無様だなぁヘリオドール。これが今の私と貴様の力の差だ！」

「景衛さん！」

「おっと。君の相手は俺だよ」

「まもちゃん……！」

こちらに来ようとするセーラー戦士を遮ったのは、エンディミオン様。いつのまにかセーラームーンに変身していたうさぎちゃんは一瞬悲しそうな顔をしたが、すぐに表情を引き締める。

「……遅くなって、ごめんね。でも必ずあなたを正気にもどしてみせる！」

「俺は正気だよ。さあ、かかってこい！」

どうやら向こうでも、戦いが始まったらしい。

「このままでは景衛さんが殺されちゃうわ。それに、きっとあの女を倒せば王子も正気に戻るはず！　ここは二手にわかれるわよ！」

「わかった！　あたしたちはここでタキシード仮面を足止めするから、ヴィーナスとマーズは向こうへ！　セーラームーンの援護は任せてくれ」
「頼んだわ、ジュピター。マーキュリー！」
　そう言ってこちらに来てくれたのはヴィーナス殿とマーズ殿。うう、なんと情けない！　戦うどころか、足手まといになってしまうとは！
「何人かかってこようと、同じことだ!!」
「そうかしら？　それは、この愛の鞭を受けてから言ってもらいたいわね！　ヴィーナスラブ・ミーチェーン!!」
「そうよ。くらいなさい！　悪霊退散!!」
　ヴィーナス殿の武器がベリルに襲い掛かり、その周囲を螺旋を描くようにマーズ殿の炎が襲い来る。どうやらこれは、まずわしを捉えている髪の毛を焼き切って助けてくれるつもりらしい。
　しかしその攻撃はベリルが腕一振りで発生させた衝撃波によって吹き飛ばされる。
「こんなものか？」
「強い……！」
「では、今度はこちらから行かせてもらおうか！」
　ベリルは持っていた杖を掲げると、そこから黒い稲妻を放出する。それはヴィーナス

殿に直撃し、その体を苛んだ。
「きゃあああ!?」
「ヴィーナス！　……ッ、許さないわ！」
すぐさまマーズ殿が自らの炎で簡易的な炎の壁を作り稲妻をふせぐ。しかしそうなると防戦一方で、とてもではないがベリルに攻撃を加えられそうにない。
しかし、ふらりと立ち上がったヴィーナス殿が何処か様子が変だ。
そして彼女は天に向けて腕を突き出すと、はっきりとした呼びかける意志でもって叫ぶ。
「あたしを、怒らせたわね……！　剣よ。我が王女守れる聖剣よ！　いや今助けようとしているのはおじーちゃんだけど、けど結果的に王女も救うから聖剣よ！　呼びかけに応え、今こそわが手に現れ出でよ!!」
その呼びかけに応え現出したのは、この場にはないはずの石の剣。

否、聖剣!!

ヴィーナス殿の手に納まった聖剣は、先端しかその本来の刀身である幻の銀水晶を露わにしていなかったはずなのに、みるみるうちに聖剣を覆っていた石が剥げて輝きを取

り戻してゆく。それにはさしものベリルも驚いたのか、わしの首に絡まっていた髪の毛がわずかに緩んだ。
「ヘリオドール殿、今です！」
「う、うむ！」
クンツァイトの呼びかけで、ぼけっとその様子を見ていたわしはハッと我に返って髪の毛から抜け出す。
「！　逃げるな！」
「逃げはせん！　仕切り直しじゃ！」
わしの脱出に気づいたベリルが叫ぶが、何もわしとて途中で勝負をほっぽり出してヴィーナス殿に丸投げする気など無い。
わしは先ほどは出す間もなかった、パーカーのポケットにしまっていたパワーストーンを取り出す。
その石は前世のわしと同じ名を持つ、ヘリオドール。……別名イエローベリルとも言われる、太陽神ヘリオスを語源に持つ石だ。
「ヴィーナス殿！　そのお怒りは、メタリアにとっておいてくだされ！　せっかく幻の銀水晶の剣が元に戻ったのです！　ここで使うにはもったいない！」
「でも、ベリルが！」

「先ほどは油断しましたが、わしとて事前に準備は整えておるのです。お任せくだされ！」
「ふんっ。どうだかな。いいのか？　せっかくのチャンスをふいにして！」
「せいぜい今のうちに吠えておけ！　では、ゆくぞ！」

さあ、第二ラウンドの幕開けじゃ!!

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ヴィーナスの呼びかけに応え、その真の姿をあらわにした銀水晶の聖剣。ふいに、ヴィーナスはその剣に文字が浮かんでいるのに気づく。
「〝クイーンたる者の内に秘める、幻の銀水晶。その心のまま、動かす時なり。完全なるそれを持ち……偉大なる月の力を目覚めさせよ〟……？」
「ヴィーナス、それは……」
「剣が……導こうとしているの……？　〝聖なる月の塔に祈りを捧げ、再び王国に平和

を”……」

そこまで読んだところで、ヴィーナスの体を再び何者かが攻撃してきた。それはベリルではなく、もっと強大な何か。

「きゃあ!?」

「まさか!?　わ、我が大いなる支配者よ……!　何故、あなたが!」

その強大な力を持つ何かの出現に、敵であるはずのベリルさえ驚愕の声をあげた。相対していたヘリオドールこと景衛も、新たにその場に現れた陰に目を見開く。

「エンディミオン様を依り代に、ここまで来たというのか……!　クイン・メタリアよ!!」

「あれが……!?」

いつのまにかエンディミオンと戦っていたはずのセーラムーン、セーラージュピター、セーラーマーキュリーも一か所に集まってくる。そしてエンディミオンの背後に現れた、黒く巨大な、邪悪な陰に息をのんだ。

『ベリルよ。今までご苦労であった』

「な、なにを……!」

『新たに現出した、幻の銀水晶の剣。しかしあの剣は、私の脅威にしかならぬ。一刻も早く、銀水晶と、そのパワーの秘密を知るであろうプリンセスを我がもとに……』

「ぷ、プリンセスは秘密を引き出し次第私が始末をつけます！　ですから、御身はダークキングダムにて座してそれをお待ちください！　必ずや、私が……！」
『もう遅い！　お前では、あの剣に勝てぬ。……ならば負ける前に、お前に授けた力を返してもらおう』
「め、メタリア様!?」
　黒い影がベリルにその腕らしきものを伸ばすと、ベリルは布を切り裂くような悲鳴を上げる。
「きゃあああああああああ!?」
「ベリル!?」
　それを見た景衛がベリルに近づくが、見えない壁のようなもので弾かれた。そしてその間に、今度はエンディミオンの手がセーラームーンに伸びる。
「あぐ!?」
「セーラームーン！」
「プリンセスは頂いた！」
　セーラームーンの腹に拳を叩き込み気絶させたエンディミオン、タキシード仮面はそのまま異空間へと消える。それと同時にクインメタリアの影も、最後の仕上げとばかりにベリルをその黒い影で覆った。

「お、おお……！　わ、が、おおい、なる、支配者、よ……」
『さあ、わが身の中で眠るがいいベリル。……永遠にな』
　ベリルの身が、砂のように崩れてゆく。しかしそこに突如、男の腕が黒い影をわって伸びて来て、ベリルの腕を掴んだ。
「ベリル！」
「し……しょう……？」
　朦朧とする意識の中、ベリルは幼き日に掴んだ枯れた枝のような腕を思い出しながらその手を掴む。その腕は老人のものではなく若々しさに溢れていたが、懐かしいぬくもりをベリルに与えた。
「ぐ、ぐううううう！」
「無茶ですヘリオドール殿！　あなたまでエナジーを吸い取られて死んでしまうわ！」
　苦悶の声をあげる景衛にヴィーナスが呼びかけるが、景衛はベリルを放そうとしない。
「わしのことはいい！　それより、プリンセスとエンディミオン様を追うんじゃ！」
「でも！」
「いいから行け！　戦士達よ!!」
　その言葉に戦士達は迷いを見せる。一刻も早く連れ去られたプリンセスを追いたい

という気持ちが強いからだ。しかしかといって、景衛を見捨ててもいけない。
しかしそこで戦士達を後押ししたのはクンツァイトだった。
「セーラー戦士達よ、ヘリオドール様を信じるのです！　あの方はご老体に鞭打って無茶はするし結構頑固だし賢者と呼ばれるくせに肝心なところで抜けている事も多いお方ですが、いざという時はやってくれるお方！　今は信じて、プリンセスたちを追ってください！　あのメタリアは本体から離れた分身でしかありません。きっと、ヘリオドール殿ならなんとかしてくれる！」
「クンツァイト……」
その言葉を受けて、四人の少女たちは頷く。
「信じますよ、ヘリオドール殿……！　いえ、景衛さん！」
「ああ！」
力強い言葉をうけて、セーラー戦士達も転移する。

向かう先は、北極圏Ｄポイント。
ダークキングダム。

『ほう、これはなかなかのエナジーだ。ベリルと共に喰らってやろう』
「馬鹿言うでないわこの汚物が!!」
景衛は苛烈な声をメタリアに叩き付けると、ぐっと腕を引っ張ってベリルを抱きしめる。
「ベリルや……。すまんかったな。わしは、やはり頼りなくて情けない、駄目な師匠じゃ」
「離れろ……。今さら貴様に同情されたところで、惨めなだけだ……。私は貴様を殺そうとしたんだぞ……？　貴様が大事にしていた王子も、殺した。四人の騎士も、自分のために利用した」
砂になってゆくベリルの体は冷たく、ぐったりとして力が入っていなかった。放せと言いつつ、自力でそれをするだけの力はもう残っていないようだ。
景衛はこくりと頷く。その体にはメタリアによるものなのか、石化の呪いが降りかかりつつあった。
「そうじゃな。わしも、さっきまではお前に引導を渡すことが我が使命だと思っておった。しかしこうしてお前が死にそうになっているのを見ると……どうしても、見過ごせなかった」

「相変わらず、肝心なところで甘いジジイね……」
そこで初めて、ベリルが笑う。その笑みが皮肉によるものだったとしても、久しぶりに見る弟子の笑顔に景衛は目に涙をにじませた。そして崩れゆくその身に、黄色の緑柱石……ヘリオドールを触れさせる。
「ベリルの罰は、わしも共にこれから背負っていこう。だから、命も半分こじゃ」
「何を……？」
ヘリオドールが淡く輝き、ベリルの中へ吸い込まれる。
「もとは、お前の中にあるメタリアの力をはじき出すために使うつもりじゃった。しかし今は、お前の命を繋ぎとめるために使おう。……わしの、ちっぽけな人間の、命の半分の結晶じゃ。どうかわしの寿命を半分、受け取っておくれ。わしの大事な大事な、可愛い娘」
慈しむように、景衛はベリルを抱きしめる。そして二人を中心に淡い光の結界が構築される。
『ここまで……か。しかし、ベリルの力はもうほとんど回収した。憐れな小娘に戻ったベリルになど、もう何の用もない。……クククッ。私はダークキングダムにて、プリンセスたちから銀水晶の力を得るとしよう……』
それを見たメタリアの分身である影は、せせら笑いながら消えて行った。それをこの

場に残り見届けていたクンツァイトは、ほっと息をついてすぐさま景衛に駆け寄る。

「ヘリオドール殿!」

残されたその場には、眠るベリルを抱えた景衛が、肌の表皮をわずかに石に変えられたまま座り込んでいた。

１０じいや，暗黒の中へ飛び込んで

わしは結局、甘い男なのだろう。

わしは若い頃はたいそう偏屈で、魔術の研究にばかり没頭してきた。そして下手に才能があったもんじゃから非常にとっつきにくく、生まれ変わった今とは違って友達など一人もおりゃあせんかった。

かなり、嫌な奴だったと思う。

幼いころに両親を亡くして厳しいワシ以上の偏屈である魔術の師匠のもとで育ったから、余計に愛情というものを知らずに成長してしまった。

だからわしには、家族というものはおらなんだ。

わしが名声を持つようになると、それを目当てに近寄ってくる女や、物好きにもこんなわしを好きになってくれる女も居た。しかしわしにはどうしてもそういったものが煩わしくて、縁談は全て断ってしまったんじゃ。今思えば随分と寂しい人間じゃった。

しかし、そんなわしも年を取るにつれて世渡りというものを身に付けていった。中身

は嫌な奴のまま、人格者を気取れるようになったのだ。その出来栄えはと言えば、王子の教育係を仰せつかるほど。……今思い出しても、本当に嫌な奴だったと思う。

だが王子の教育係は、わしに遅すぎる人生の転機を与えてくれた。赤子から見守るにつれて、王子が愛しくてたまらなくなったのじゃ。恐れ多くも家族とはこんなものかと、思ったほどに。

それからというもの、わしは積極的にまわりと関わり始めた。取り繕うのではなく、心から。初めて人間が愛おしいと思え、自分が身に着けた力を地球国のため、人々のために役立てたいと思った。その頃から段々と「穏やかになりましたね」な～んて言われるようになって、ちょいちょいおふざけを覚えてきたのもそのあたり。……普通の人間よりもかなり長生きして百五十の齢はとうに越えていたが、わしはようやくまともな人間になれた気がした。

ベリルもまた、そんなわしにとって慈しむべき存在じゃった。なにしろ初めての正式な弟子で、わしの全てを授けようと思った娘なのだから。

クインメタリアに力を奪われ死にかけているをの見たら、居ても経ってもおられず助けてしまった。過去にベリルの心を踏みにじった、うしろめたさもあったのだろう。だ

が結局、過去……ベリルが過ちを犯す前に殺せなかった時のように、わしはベリルに甘かった。見捨てる事など、殺すことなど最初から不可能だったのじゃ。

わしは腕の中で穏やかに眠るベリルを見て、ため息をつく。

……実はこの子が起きたら、なんと言われるかちょっと怖い。助けてほしくなどなかったと、罵るじゃろうか。

「……すまんのぉ、クンツァイト。エンディミオン様を殺し、おぬしらを苦しめたこの子を、助けてしまった」

「……気にしないと言えば、嘘になります。ですがそれについて話すのは後にしましょう。我々も、ダークキングダムへ行かなければ」

「おお、そうじゃったの。では、行こうか」

よいせっと、腰を上げる。しかしギシリと体の動きが鈍く、思うように動かせない。

「ヘリオドール様！　やはりそのお体は……」

「すまん。おぬしはわしを信じろと言ってセーラー戦士達を送り出したのに、結局メタリアの分身体も倒せず、それどころか呪いを受ける始末とは……。どこまで不甲斐ないんじゃ、わしは」

しかしこのままでいるわけにもいかん。よたよたとした動きで、ベリルを抱き上げたまま亜空間を歩く。誰ぞが気を利かせてくれたのか、ぽつぽつと闇の中に道しるべが見

えるのだ。……きっとこれを辿っていけば、ダークキングダムへたどり着く。

「さあ、メタリアと決着をつけよう。エンディミオン様やプリンセス、……そしてお前が今度は穏やかに生を終えることが出来る、世界を守るために」

亜空間を抜けた先は、寒風が吹きすさぶ巨石群だった。おそらく北極圏。巨石はおそらく、メタリアの影響だ。太古の昔の地球とまったく同じである。

「ヘリオドール様、こちらへ。……ゾイサイト達の核は現在、エンディミオン様と共にあるようです。そして主を守っている。私にはその居場所が感じられる。無力な身なれど、道案内くらいは出来ましょう」

「そうか……。頼む」

汚染されないように地脈の力を使わず、あらかじめ持ってきておいたベリルに与えたものとは別のパワーストーンに秘められたエナジーで魔術を使う。すると身を切るよ

うな極寒が、わしの結界で阻まれた。
「行こう」

しかしわしらはダークキングダム内部に入る前に、ヴィーナス殿達と再会することになった。……しかし彼女らの中に、うさぎちゃんとエンディミオン様は居ない。
「景衛さん、無事だったのね！　……ベリル!?　それに、景衛さん。その体は……」
「すまん、彼女の事は後で説明する。わしの体も大丈夫じゃ。……エンディミオン様とプリンセスは？」
わしが問うと、ヴィーナス殿は強く唇を噛んだ。
「……うさぎちゃんは、聖剣でタキシード仮面を討って自害したわ」
「!!」
まさか！　そうわしが叫ぶ前に、クンツァイトが叫ぶ。
「いいや！　それはない。我が主もプリンセスも生きている！」
「！　何故そう言い切れるの!?」
「我らが同士が、エンディミオン様をお守りしている。そして、彼らが感じている鼓動が私にも伝わってくるのだ。……近くに居るプリンセスの鼓動も、一緒にな」
「それは本当!?」

クンツァイトの言葉にぱっと戦士達の表情が明るくなるが、しかしそれもすぐにひっこむ。それはおそらく、地表に黒く巨大な気体……メタリアが現れたからじゃ。

『月の王国の女王に封印され、地底奥深くに身を潜めた。……長かった。だが！　今こそ蘇ったぞ！　ああ！　私の中から幻の銀水晶の力が漲ってくる……。今こそこの星全て、私のものだ!!』

「ば、馬鹿もんがああ！　貴様などにくれてやるか！　と、私の中からじゃと!?　おいおいヴィーナス殿。もしや王子と姫はあの中か!?」

「ええ。二人が倒れた後、幻の銀水晶の結晶が大きくなって二人を覆いつくしたの。それをあいつは飲み込んだのよ」

「でもメタリアを倒すには、完全なる銀水晶が……タキシード仮面の中に吸い込まれた銀水晶の力と、うさぎちゃんの銀水晶の力をあわせるしかないんだ！」

ジュピター殿の言葉に、そういう事かと歯噛みする。……メタリアを倒したいが、その手段はあの闇の中、というわけか。

「でも、このまま何もしないなんて出来ないわ！　みんな、攻撃しましょう！」

そう言ったのはマーズ殿。しかしそれは、わしが止めた。

「いかん。奴はあらゆるエナジーを吸収する化け物じゃ。わしには見える……。地球上のエナジーが、銀水晶を吸収したあやつに吸われている様が。きっと生半可な攻撃で

は、逆にメタリアにエナジーを与えるだけじゃろうて」
「だけど、あたしたちの攻撃……みんなの力をあわせた、セーラープラネットアタックなら……」
「マーキュリー殿。それよりも、わしに賭けてはくれませぬか」
「え？」
　わしはベリルをヴィーナス殿に差し出す。すると戸惑いながらも、ヴィーナス殿はベリルを受け取ってくれた。
「見ての通り、この身はメタリアの呪いに侵されつつある。しかし同時に、この呪いからわしはメタリアのパワーにわずかながらアクセスできるようじゃ。それをうまく使えば、しばしの間なら、あの闇の中でも耐えられるじゃろう」
「まさか……あの中に突っ込むつもり!?」
「ああ、そうじゃ」
「では私もお供しましょう、ヘリオドール様。王子と我が同胞のもとへ案内をいたします」
「いや、おぬしは今やもろい核を抱えた存在じゃ。ここはセーラー戦士達と共に……」
　あの中へ連れて行けば、今度こそ魂ごと砕けてしまうかもしれん。そう思ったのだが……。

「オレも連れていけ！　ヘリオドール!!」
今まで騎士然として振る舞っていたクンツァイトが、わしの言葉を聞いた途端、らしくもなく激高したように叫んだ。
「嫌なんだ！　もう、王子を守れないのは！　オレはこの命投げだしてでも、仲間と共に王子を守る！　頼む……行かせてくれ……！」
今は小さい体だというのに、その気迫に思わず圧倒された。
……そうよなぁ……。お前も、悔しかったんだものなぁ……。
「わかった。共に行こうクンツァイト。それと、今我らは対等な存在。口調もそのままでかまわん」
「……！　感謝する」
クンツァイトを再び肩に乗せて、わしはセーラー戦士達に向き直る。
「……止めても行くんでしょうね……」
「ああ。ヘリオドール様は、オレ以上に頑固者だからな」
「これ、クンツァイト。わし以外にはもっと敬意をもって話さんかい。散々迷惑かけた相手じゃぞ」
「ふふっ、いいのよ。……昔を思い出すもの」
ヴィーナス殿は一瞬瞼を閉じる。そしてそれが次に開かれた時その表情は毅然とし

ており、自然とわしらの背筋も伸びる。
「あたしたちは銀水晶の剣の文字を元に、別のアプローチから対策を考えるわ。最後の一文……聖なる月の塔に祈りをささげるって部分が、きっとうさぎちゃんが真の銀水晶の力を引き出した後に必要だから。そしていざという時は……あたしたちも、命を賭ける。あなた達がうさぎちゃん達のもとにたどり着いたと信じて、ありったけの力を送るわ。それが、メタリアを倒すきっかけになるように」
「その覚悟。しかと受け取りました」
　わしは最後にヴィーナス殿、マーズ殿、ジュピター殿、マーキュリー殿としっかり握手してお互いの健闘を祈った。そして最後にヴィーナス殿に託したベリルの頬を撫で、彼女たちに背を向ける。

　向かうは、クイン・メタリアの内部!!

「待っていてくだされ！　今、じいやが助けに参ります!!」

11じいや，月に代わってお仕置きよ！

格好良くきめたものの、わしらのメタリア潜入方法は実に地味じゃった。なんというか、地面にへばりついて気配を消して、じりじりと気づかれないようにメタリアの内部に入っていったのじゃ。……ゴキブリにでもなった気分じゃわい。いや、奴らの生命力は凄いが。地球国の頃からまったく姿を変えず存在しておる。

「……もう少し、何とかならないのか？」

「贅沢言うな。メタリアに見つかって攻撃されたら、それこそ一貫の終わりじゃわい。今奴はエナジーを吸って吸って吸いまくってぶくぶく太っていい気になっておるから、羽虫のようなわしらに気づかんだけじゃ。そのまま最後まで目立たぬように進むのが得策」

「そう、だな。……あ、そこ右」

「あい分かった」

クンツァイトの指示で進むが、段々とその動きが鈍くなっていくのに気づく。……石化が進んできておる。急がねば。

　そのまま、何分、何十分、何時間彷徨ったのかわからぬまま、ただひたすら黙々とわしらはメタリアの内部を進んだ。こうしている間にも、地球は……。
「……こんな時だが、ひとつ聞いていいだろうか」
「……なんじゃ？」
「正直、この戦いで勝てた後。俺達はエンディミオン様のお傍に居ることは可能か？例えば、この小さな姿のままでも」
　クンツァイトがこぼした言葉に不安を感じ取り、わしは苦笑するとクンツァイトの頭を撫でた。
「！　ヘリオドール様！　子ども扱いしないでいただきたい！　……だが、すまない。今のような弱音をこぼす場面では無かったな」
「いや、かまわぬよ。メタリアはあらゆる邪悪を懲り固めたような存在。その中に居て、気が狂わないだけ上等じゃ」
「……すまない」
「そう思うなら、うじうじするな！　……心配せずとも、おぬしらの事はわしが何とかしよう。安心せい」
「……その時、ベリルにしたようにあなたの寿命を使うというのは無しだぞ」
「な、なんのことじゃ？」

内心を見透かされ焦るわしを見て、クンツァイトがやっぱりとでも言うようにため息をついた。
「あなたはベリルに共に罪を背負って生きていくと言っていたでしょう？　なら、あなたはそれを果たさなければならない。オレ達は自分の事は自分でどうにかする」
「……さっきまで不安そうに弱音を吐いていたのは誰だったかのぉ……」
「だから、それはすまないと言っている」
そんなやりとりをしておったら、いつの間にかどちらともなく笑っておった。
「ふふ、はははっ。さ～て、じゃあ心置きなくどうにかするために、邪魔なメタリアはさっさと倒さねば！」
「そうだな……。……ヘリオドール様。もうすぐだ」
クンツァイトの言葉に、わしは前方に顔を向ける。そしてぼんやりとした光を見つけ、慌ててわしはそれに駆け寄った。

「エンディミオン様!?」
「！　景衛さん！」
見ればエンディミオン様は目覚めぬようだが、うさぎちゃんは意識を取り戻している

ようじゃ。
　しかし再会を喜ぶ前に、不快で耳障りな声が耳に届く。
『目覚めたか、月の王国の血を引くものよ……！　なんという生命力だ。生意気な！　おや、余計な虫までもぐりこんでおるな。……共に握りつぶしてくれる』
「ぐあああああ！」
「うっ、ああ！」
「景衛さん！　クンツァイト！」
　メタリアの攻撃は銀水晶に守られていないわしらに真っ先に襲い掛かった。するとうさぎちゃんは巨大な水晶の中でひときわ輝く睡蓮の花のような形になった幻の銀水晶を手に取り、祈るように掲げる。
『！　何だと!?』
　すると光がメタリアの闇を切り裂いて立ち上り、気づけばわしらはメタリアの外に転移してきていた。
　お、おお……。なんというか、わしらが何をするまでもなく自力で出られたのぉ、うさぎちゃんや……。良いことなんじゃが、ジジイ、ちょっとショック。
　……。いやいやいや、ショックを受けている場合では無いわ!!　外に出られたとなれば、通信機が使える!!

「ヴィーナス殿、応答せよ。応答せよ!! 今うさぎちゃんとエンディミオン様がメタリアの中から脱出した! 幻の銀水晶も力を取り戻しておる! 好機は今じゃ。セーラームーンの援護のため、思いっきりプラネットパワーを送ってくれ!!」

『こちらヴィーナス。本当!? 了解したわ! こちらはルナとアルテミスがが再び月へ向かっている。シルバーミレニアムの祈りの間があったクリスタルタワーへ!』

「! 〝聖なる月の塔に祈りを捧げ〟じゃな! うさぎちゃん、聞いての通りじゃ。月に祈りを届ける勢いで、ありったけの銀水晶の力を引き出すんじゃ!」

通信を終えてうさぎちゃんを見れば、なんとエンディミオン様も目を覚ましておられた。しかし様子が少し変だ。

「まもちゃん……!」

「見えない……何も……」

「エンディミオン様、まさか目が……!」

エンディミオン様の横に駆け寄ったクンツァイトがショックを受けたように青ざめるが、そんなこと構った事かとメタリアが襲い掛かってくる。それをうさぎちゃんが銀水晶の光で防ぐが、それはメタリアを押しとどめつつも肥大化させる。

「どうして!? 幻の銀水晶でこいつを封印できるんじゃないの!? あたしじゃ……力不足、なの……!?」

崩れ落ちそうになるうさぎちゃんを、がしっと支える。
「！　硬い……。景衛さん、体が！」
「いいんじゃ、わしのことは！　それより今は目の前の事に集中してくだされ！」
「他に、誰かいるのか……？　クンツァイトに、それと……誰だ？」
目が見えないながらも、ふらふらと近寄ってくるエンディミオン様。その体もうさぎちゃんと同じように支え、わしは万感の想いをこめて名を告げた。
「ヘリオドールですじゃ。エンディミオン様……」
「……じいや？」

その時の感情を、どう表そうか。
歓喜が全身を駆け巡る。

「……！　そうですじゃ！　エンディミオン様の、じいやですじゃ！　ふぐぅっ」
「ヘリオドール様！　泣いている場合ではないぞ！　……今、ゾイサイト達とコンタクトがとれた」
「何？」
クンツァイトの言葉を受けて、エンディミオン様が胸元からなにやら取り出す。……

そこにあったのは、粉々に砕けた三つの宝石だった。
「！　これが、俺の命を守ってくれたのか……」
「……まもちゃん。あたしの命はね、まもちゃんから預かった時計が助けてくれたのよ」
「そうか。俺はこの宝石が、うさこは時計が守ってくれた。……それで俺たちは今、生きていられるんだな」
『マスター』
「！」
　愛し気に宝石を撫でたエンディミオン様。すると、宝石の残骸から声がした。
「ジェダイト、ネフライト、ゾイサイト!!」
『クンツァイト。あなただけでも無事で、よかった』
　宝石から光があふれ、人の形を作る。それは四人の騎士のうちの三人。……彼らは文字通り自分たちの命をかけて、エンディミオン様を守ったのじゃな。……核である宝石でもって、エンディミオン様をお守りしたのじゃ。
『エンディミオン様。やっと、お会い出来ましたね』
『クイン・メタリアは邪魔なものをすべて石に変える力を持つ、闇の帝王です。全てのエネルギーを吸収し、暗黒の実体を増大させる悪魔』
『あいつの額の、あのマーク』

　口々に話す彼らは、メタリアの額にあるひし形の模様を指さした。
『この体になってから観察して気づきました。あの額のマークこそ、クイン・メタリアの心臓部です！』
『まぬけにも奴は心臓部をあんな目立つところに出している！　あそこに力を集中させ攻撃すれば、きっと……！』
「……おぬしら、砕けている割にずいぶん元気じゃのぉ……」
『？　誰だお前は』
「……ヘリオドール様だ」
『え、おじい様⁉』
「……ゾイサイトにそう呼ばれるのは、懐かしいのぉ……」
　そういえばゾイサイトは、四人の中でも甘えん坊じゃった……。小さい頃から時々面倒みとったわしを、祖父と言って慕ってくれたのだった。
『この方がヘリオドール様？　ずいぶんとお若い……』
『いや、でも見ろ。あのうさん臭い狐顔はヘリオドール様の面影がある』
「ジェダイトおぬしそんなこと思っておったのか」
　数万年ぶりにわしの顔がどう思われていたのか知ってショックだわい。
「あ、あの～！　お話してるとこ悪いんだけど、ちょっとそろそろ厳しいっていうか……

！」

「お、おお。すまんかった、すまんかった！」

わしらが久しぶりの再会に思わず会話していると、泣きそうな声のうさぎちゃんが苦しそうに言った。どうやらメタリアに押されているらしい。

「セーラムーン！　メタリアの急所は額だ！　いつもの元気を出せ、泣くな！　自信を持つんだ。君の仲間もきっとそう思っている」

『その通り！　お待たせうさぎちゃん！』

「え!?　……美奈子ちゃん!?」

エンディミオン様がうさぎちゃんを励ました、正にその時。……月からまっすぐに、うさぎちゃんに向かって大量のエナジーが降り注いだ。

『今あたしたちもルナを追って月に来たわ。ここからならメタリアの気に邪魔されず、まっすぐにうさぎちゃんに力を送れる』

『頑張って、うさぎちゃん！　タキシード仮面も、景衛さんも居るんだろう？　大丈夫。きっとうまくいくから！』

『ルナが月の塔に祈りを捧げてる。あたしたちのパワーを辿って、うさぎちゃんも銀水晶の力を振り絞って！　きっと、祈りは伝わるわ！』

「亜美ちゃん、まこちゃん、レイちゃん！」

「どうやら、頼もしい援軍のようだ。……さあ、行くぞ。俺が君のすぐそばで支えている。パワーが足りないなら、俺が君に力を注ぐ。……ずっとそばについている。セレニティ」
「エンディミオン……」
見つめ合う二人。取り合う手と手。

……しかし、その間にはお二人を支えるわしが挟まれておる。

『折角の美しい場面が台無しです、ヘリオドール様……』
「う、うるさいわいジェダイト。おぬしは昔から皮肉に過ぎる……！」
『いえ、事実です』
『今はそこまでにしておけ、ジェダイトよ……』
ね、ネフライト。すまぬ、感謝する。
いやしかし、それにしても元気じゃなこいつら。消えてほしいわけじゃないが、一向に消える気配がないんじゃが。核を砕かれているくせに。

しかし二人の世界を作るプリンセスとエンディミオン様の前には、わしらなど最早背景！　こうなりゃ背景として、全力を尽くすまでよ!!

『！　こんな小娘一人が、銀水晶のパワーを!?　私を封じ込めなどさせぬ！　粉々に打ち砕いて、捻りつぶしてくれる!!』

銀水晶の光をますます強くして、ついにはメタリアを退け始めたうさぎちゃん。否、プリンセス・セレニティ!!

「いいえ、クイン・メタリア。お前こそ暗黒の塵となるのよ！」

強く光り輝く銀水晶が浮かび上がり、うさぎちゃんはそれに受けてステッキをかざす。すると短かったステッキが瞬時に伸びた。

「エンディミオンを、まもちゃんを酷い目にあわせて、地球をめちゃくちゃにして、景衛さんまで石にして！」

「いや、まだ完全に石になっては……」

「お前は絶対許さない！」

その時、ひときわ白く強く、月が輝いた。そしてその光を背負ったうさぎちゃんが、ビ

シッとポーズを決める。

「月に代わって、お仕置きよ!!」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「う……ん……」

地場衛は、朝の光に目を覚ました。先ほどまで長い夢を見ていた気がするが、それが数日前までの激しい戦いの記憶だと思い出す。

自身の交通事故で失われていた記憶を求めて幻の銀水晶を探していたら、それは前世の記憶まで引っ張ってきた。愛しい、月のプリンセス。セレニティ。……彼女と共に。

「うさこ……」

愛しさをこめて名前をつぶやけば、ふいに鼻をくすぐる香りに気づく。それはどうやら味噌のようで、それと一緒にトントントンッという、まな板で何かを刻む音が聞こえてくる。

まさか愛しい乙女が、自分のために朝ご飯でも用意してくれているのだろうか。だとすれば、それはなんと幸せなことだろう。

夢見心地……もとい寝ぼけまなこで、衛はふらふらとベットから起き上がりいい匂いのする方向へ歩いてゆく。

そして彼にしてはオーバーリアクションで、ばっと腕を広げて台所に入った。

「うさこ！」

「エンディミオン様！」

「……うさこ？」

それにしては、ずいぶんと声が低い。それはそのはずだ。

台所に立っていたのは、エプロンを身に着けた衛よりも背が高く体格が良い、狐顔の青年。

「え、土御門……？」

「あ、エンディミオン様だ！」

「おはようございますエンディミオン様！」

「おや、まだ着替えていないのですか？　用意いたしますので、少々お待ちを」
「……もしや、寝ぼけておいでか？　景衛はヘリオドール様の生まれ変わりですよ」
それどころか、どうにも人口密度が高い。どこから湧いてきたのか、男が四人衛を囲む。それぞれ顔の作りは良いが、可愛らしい乙女を想像していた衛としては少々暑苦しい。
そして呆然とする衛が口にしたのは、目の前の男の懐かしい呼び方だった。

「……じいや？」
「はい！　じいやですじゃ！　ううっ、何度呼ばれてもお懐かしゅうございます……。エンディミオン様ぁぁぁぁぁ!!」
「うわあああああ!?」
感極まった狐顔。……景衛にアメフト選手のタックルのごとく抱擁を受けた衛は、そのまま転倒した。

新しい朝の始まりである。

12じいや，戦いのその後で

クイン・メタリアは倒され、世界に平和が訪れた。

そしてその数日後。昔のようにエンディミオン様のお世話が出来ると喜び勇み、わしはいそいそと朝食の材料をもってエンディミオン様の住居まで訪れていた。ここ最近の、わしの新たな朝の日課じゃわい！

しかし、そんなわしは何故か今……正座させられている。

「ヘリオドールおじい様ったら、加減が出来ないんだから。そんな勢いで抱き着かれたら、寝起きのエンディミオン様じゃ倒れて当たり前ですよ」

「ああ。昔は年のせいか俺達よりもお小さかったが、今はクンツァイトと同じくらい背丈があるんだ。体格もいい。……もっと自重してください」

「色々あったのです。エンディミオン様もまだ記憶が混濁することも多いでしょうし、我々はそれを支えねばならないのですよ。それを支えるどころか押し倒してどうするんですか、ヘリオドール様」
「まあ、お気持ちは分からなくもないが」
　勝手にわしが作った卵焼きをつまみながら呆れたように言うゾイサイトに、タンコブを作ったエンディミオン様の頭を氷で冷やしつつため息をつくジェダイト。エンディミオン様の寝癖を直そうと櫛とドライヤー装備のネフライトに、バリスタ並みの優雅な所作でエンディミオン様に珈琲を淹れるクンツァイト。
　約一名つまみ食いをしているだけじゃが、それぞれ思い思いにエンディミオン様のお世話をしている。そして、みな一様にわしを責める。
　ううっ、味方はおらんのか！　だって、だってのぉ！　じいやと、昔と変わらぬお声で呼ばれたら、嬉しいに決まっとるじゃろうが!!　このパッションをち～っとくらい理解してくれてもバチはあたらんぞ！
「……。とりあえず、みんなちょっと近い。色々してくれてありがたいんだが、正直ここまでされるとありがた迷惑の域だ」
　そんな中、額に手を押し当てて困ったというか居た堪れないというか、そんな表情で言うエンディミオン様。その言葉に四人はショックを受けたように固まるが、エンディ

ミオン様はひきつった笑みを浮かべ首を振る。

「俺もちょっと我慢してたけど、この際言わせてもらおうか。……顔も一人で洗えるし着替えも一人で出来るし歯ブラシも自分で出来る!! いい声の子守歌も耳元に生モーニングコールもいらない! とりあえず何から何まで世話を焼こうとするのはやめてくれないか!? 俺はもう、王子じゃないんだぞ? 地場衛! 高校生だ! 一人暮らし歴長い、高校生だ! というか、王子の時だってこんな赤ん坊みたいに世話焼かれたことはないだろう!? 子守歌ってなんだ!? 会えて嬉しい気持ちは俺も同じだから、頼むから土御門だけでなくお前らも、もうちょっと色々押さえてくれ!! 大の男が揃いもそろって好意が暑苦しい!」

一息に言い切ると、ぜーはーと荒い呼吸をつくエンディミオン……否、衛様。最初は大人しくクンツァイト達の好意を受け入れていたようだが、知らないうちに色々と溜まっていたらしい。

ふんっ、これではわしの事だけ言えぬではないか!

しかし、わしは年長者。この場を取りなさなくては。

「ま、まあまあ、衛様。お気持ちも分かりますが、少々落ち着きなされませ」

「そして土御門！　お前はとにかく様付けだけはやめてくれ！　口調が直らないのはもうわかったから！」
「な、何故に!?　それと、土御門などと水臭いではありませんか！　じ・い・やと、呼んでくだされ♡」
　わしがそう言うと、何故か衛様はぶるりと震えて腕をさすった。
「い、いいか？　最初に言っておくが、その好意は嬉しい。じいやにまた会えて、俺だって嬉しさ。……けどな？　同性の同級生がいきなりジジイ言葉になって、毎朝朝食を作りに来るというシチュエーションを受ける俺の身も、もうちょっと考えてくれよ……」
「エンディミオン様、おいたわしや……」
「ヘリオドール様、気を付けてくださいね」
「いや、だからお前らもだからな？　いきなり甲斐甲斐しく世話を焼いてくる男が四人も同居者になって、押しかけ同級生が一人出来たとかちょっと……いや嬉しいけど」
　おお、なんとお優しい！　ちゃ～んとわしらが傷つかないように、諌めつつも嬉しく思ってくださっていることを伝えてくださる。……今生でのご両親はお亡くなりになったと聞いたが、ちゃんと衛様を優しい子に育ててくれたんじゃな……。ありがたいことだ。

クイン・メタリアは、うさぎちゃんが解放した幻の銀水晶と月の真なる輝きの力の前に塵となってやぶれた。そしてその後メタリアの呪いから解き放たれ蘇った月の王国へ向かった彼女の力により、エナジーを吸われた地球と人々は癒され、再び平和な世界は取り戻されたのじゃ。

そしてあの戦いの後、なんと核を砕かれ消えるとばかり思っていたジェダイト、ネフライト、ゾイサイトは、クンツァイトが自らの体に……核である宝石に、彼らの魂を受け入れる事で消滅の難を逃れたようだ。これにはメタリアを倒した後、うさぎちゃんとエンディミオン様が回復のエナジーを使ってくれたことも大きい。

つまり今の四人は正真正銘の一心同体。わしが結界を張った衛様のお部屋の中だけならばそれぞれ体を構築し、人の体で行動することが可能だが……。ここから一歩でも外へ出れば、彼らが四人同時に存在することはできない。誰か一人だけが宝石を核として、人の姿をとれるのだ。

途中で入れ替わることは可能じゃがのぅ。

これについては、本人たちはあまり悲観していない。

「ま、消えなかっただけで御の字ですよ。利用されて、散々迷惑かけて、償う前にポックリだなんて笑えない。それを考えれば、今の形は最上級の幸運でしょう」

「ええ。今の俺達を育ててくれた家族には悪いが、最早俺たちはこの生に唯一無二の目的を見つけている。こんな体で戻ったところで未練を残させてしまうだけですし、俺達はこのままエンディミオン様のお傍でお仕えします。かつての、地球国の時のように」

「今度こそ、最後までお供させてくださいエンディミオン様。俺達は、あなたの助けとなるために、生まれ変わって来たのですから」

「ああ。どんな形であろうと、俺たちは今ここに居る。だったら、存分に我らがマスターのために力を振るおう！」

……と、いうことらしい。まあ、これについてはわしも同意見なわけじゃが。

このわしヘリオドールこと土御門景衛も、此度の生で再びエンディミオン様……衛様に忠誠を誓おう。そして、陰ながらお守りしていくのじゃ。

でもって何が出来るか考えたところ特に敵が居ない今、とりあえずお世話を焼こうという事になって、それがあの過保護なありさまじゃ。

……ストレスで衛様の頭に十円ハゲでも出来たらゆゆしき事態じゃし、わしもあやつらも、衛様を構うのはほどほどにしておいた方がよさそうじゃな。

何しろ、衛様はまだ高校生。思春期真っ盛りじゃ！　前世の恋人たるセレニティ様、うさぎちゃんとも晴れて恋仲になったようだし、そんな時に男の側近が五人もべったりというのはいかん。これからは衛様のプライベートにも気を使わなければな！

そして、わしが生かし、保護したベリルなのじゃが……。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「いや～！　すっかり平和よねー！」

「どうしたのよ、いきなり」

教室の机にぺったり横頬をくっつけ寝そべったうさぎが、だらけきった様子で言う。

すると親友である大阪なるがおかしそうに笑った。
　ここ最近素敵な彼氏も出来たせいか、うさぎは一日中幸せそうな顔でにやついているのだ。しばらく前まで元気が取り柄を言わんばかりのうさぎがどこか悲しそうで、ふさぎ込んでいるように感じていたなるは、その様子に呆れながらもとても安心しているのだ。自然と笑みも浮かんでくるというものである。
　そして突然、そんな二人の間に牛乳瓶の底のような眼鏡をかけた男子生徒、海野が割り込んできた。
「ところでお二人とも、ご存知ですか？」
「うわっ！　ちょっと海野、いきなりビックリするじゃない！」
「そうよ！　……でもご存知ですかって、何が？」
　海野は二人の注目が自分に集まるのを感じると、眼鏡をくいっと持ち上げて得意げに笑う。
「フフフフフ。実はですねぇ……なんと！」
「「なんと？」」
「今日から数学の先生が産休に入られるので、新しい先生がやってくるんですよ!!」
　それを聞いた途端、うさぎもなるも「な～んだ」と口をそろえて言う。そんなことちょっと前から誰もが知っている事だ。ニュースでもなんでもない。

しかし海野は笑みを崩さない。
「それがですねぇ……。新しい先生、ものすっごく美人な外人の女の人なんですよ！僕は残念ながら後ろ姿しかまだ見ていないんですが、男の先生方の鼻の下の伸びっぷりをみるに、相当ですよこれは……！」
「ふ～ん」
「へ～え」
美人な外人の女教師。興味はある。しかしそれに興奮する海野と、海野の話を聞いて期待を膨らませる男子に向けられる女子からの視線は冷たい。
「でも、すっごい美人か～！　ちょっと楽しみかも。あとあと、あたしはとりあえず、優しい先生だといいな～って」
「うさぎったら、数学も苦手だもんね～」
「そうなのよ～、あはは。だから、あんまり宿題出さない先生だと嬉し」
言いかけた、その時。
「ほう、怠惰な生徒も居たものだなぁ。喜べ。存分に優しく、特別に、可愛がってやろうではないか」
その声にぎょっとなってうさぎが振り返ると、そこに居たのはスーツを纏った赤髪の麗しい美女。

「べ、べべべべべべべ、ベリル〜〜〜〜〜〜!?」

うさぎの声が、教室中に響き渡った。

13じいや（終），月が照らす青い碧いこの星で！

スーツ姿のベリルを前に飛び上がって驚いたうさぎは、とりあえず衝動のままにベリルの腕を引っ張って脱兎の勢いで教室を飛び出した。そして人気のない校舎裏まで行くと、息を切らせながらもベリルを問いただす。

「ちょ、ちょっと！　なんであんたがこの学校に!?　教師って何!?」

「フンッ。弱々しい小娘かと思ったら、今度はずいぶんと姦しい。それより私はお前の教師だぞ?　呼び捨てにするな。呼ぶなら「ベリル先生」だ。せいぜい敬うがいい」

「な、な～にがベリル先生よ！　また何か企んでるんじゃないでしょうね!?　……あ！　分かった。まもちゃんをどうにかしようってんでしょ！　魅惑の女教師って感じで色仕掛けでもする気!?　そ、そうはいかないんだから！」

「はぁ……本当にうるさいわね。それでもプリンセスか?　馬鹿な事言ってないで、ちょっとは静かにしたらどうだ」

うさぎは前世からつい数日前に至るまでさんざん酷い目に遭わせてくれた女をにらむが、その上から目線ながらも落ち着いた態度に次第に疑問符が頭の上を踊り始める。そしてあることを思い出すと、ぽんっと手を打った。

「あ、そっか。そういえばあなた、今景衛さんちに居候してるのよね。景衛さんがベリルに何か償いをさせるって言ってたけど、もしかしてこれがそうなの？」

数日前。メタリアとの戦いの後で、景衛がベリルに己の命の半分を分け与えてその生命を繋ぎとめた事を知った。その時に「邪悪なものにつけこまれ心奪われていたからとはいえ、こやつがしたことはけして許される事ではない。それを承知で、図々しくもお願いしたいのだ。どうかこの子を、わしにあずけてくださらんか。わしはベリルと共に、この子の罪を背負って生きてゆくと決めた。だから監視もかねて、ベリルのそばにいたいんじゃ」と言われたのだ。

当然四戦士は渋い顔をしたが、それについてはうさぎが自分でベリルを許すことを決め場をおさめたのである。前世で殺された張本人であるエンディミオン……衛も納得済みだ。

ベリルに最も強く憎しみを抱いてもおかしくない二人が許したとなれば、四戦士がそれ以上言える事は無い。凄まじい力を持つ巨悪につけこまれたとはいえした事がした事なので、文句くらいは言いたいが。

うさぎとしては当然エンディミオンこと衛を譲る気はない。が、もとはといえばエンディミオンへの恋心が、そして自分への嫉妬の心がベリルを闇に堕とした。それを思えばこそ、もとからあまり人を本気で憎むことが少ないうさぎとしてはメタリアと決着が

ついた今、心の底から憎悪を抱くのは難しいのである。かといって思うところがないわけでもないので、もやもやとした名前のつかない感情をもてあましていたのも正直なところだ。

ならば逆にスッキリ許して、あとは信頼のおける景衛に任せようと思ったのである。

……まあそれも、ベリルが教師として現れたインパクトで一瞬忘れていたのだが。

ベリルはうさぎの言葉に苦虫を噛みつぶしたような顔をすると、嫌々ながら頷いた。

「……そうだ。償いの一環として、プリンセスを未来のクイーンに相応しい淑女にするべく、尽力しろと言われた」

「べ、別にいいわよそんなの……」

「ほほう？　そんな事を言える立場かしらね。テストで三十点をとったことがあるそうだな？」

「うげ!?　な、なんであんたがそれを……！」

「景衛から聞いたのよ。ああ、それとあの男も随分と張り切っていたわ。どうやらプリンセスは勉強が苦手なようだから、自分が家庭教師の役をかってでよう、と」

「えええ!?　き、聞いてない！　景衛さん、そんな事言ってたの!?」
「今は王子にかまうのが楽しくてしょうがないらしいが、もう少し落ち着いたらその矛先はお前にも向くだろうさ。もちろん私も”償い”として、存分に贔屓して可愛がりながら、たっぷり勉学を仕込んでやるつもりだぞ？　楽しみだなぁ、プリンセス……いや、月野。この私自ら、王子に相応しい姫君に仕立て上げてやろう」
　艶めかしく、ベリルが唇の端をもちあげる。妖艶かつ美しいが、控えめに言ってもたいへん意地わるそうな笑い方だ。
　それを見て、ぎゃふん。表現するならそんな表情で、うさぎは撃沈した。気分は門前の虎、後門の狼。大嫌いなお勉強の挟み撃ちである。
　その様子を見てベリルは溜飲が下がったような、どこかスッキリしたような清々しい表情となる。しかし次いで、ベリルはうさぎから視線を外してこう言った。
「……安心しろ。もう王子の事など、どうとも思っていない。この間我が伴侶になどとは言ったが、あれはただの意地のようなものだ。今さら、あんな若造にうつつを抜かすまいよ」
　わざわざそれを明言したことに、うさぎは意外に思ってベリルを見上げる。メタリアに付け込まれたとはいえ、それほどの隙を作ってしまう恋心。自身も恋する乙女であるうさぎとしては、そう割り切れるものだろうかと疑問に思ったのだ。

それにもしも、ベリルの内心が今言った通りのものだったとして。あからさまにプライドが高そうなこの女が、わざわざそれを自分に言うだろうか。

「あ！」

そこで、乙女の勘がピンとくる。

「……もしかしてベリル、他に好きな人出来た？」

「はあ!?　何故そうなる！　馬鹿な事を言うでないわ!!」

「そういえばな～んか若々しく見えるなって思ってたけど、お化粧変えたよね」

「……変えてない」

「嘘！　絶対変えた！　前はおばさんって感じだったけど、今はお姉さんって感じだもん！　ねえねえ、どうなのよ～。お相手は誰なの？　ねえったら～」

「誰がおばさんか誰が！　う、ううう煩い！　よるなつつくなにやけるな！　それよりもうすぐ授業だ。教室に戻るぞ！　たっぷり仕込んでやる!!」

うりうりと、ちょっと前まで宿敵だった相手の体を冷やかすように肘でつつくプリンセス。その光景を四戦士あたりが見れば、その危機感および緊張感の無さに、まず頭を抱えたことだろう。実を言えばベリルも出来る事なら頭をかかえたい。もっと罵られ

ることを想像していたのに、ちょっと噛みついた後はこの様子だ。非常に調子が狂う。

そしてベリルはしつこいプリンセスをいなしつつ、数日前の出来事を思い出していた。

「どうか、お願いです。この女性をうちに住まわせては貰えないでしょうか」

そう言って正座の体勢から非常に美しい所作で深々と頭を下げたのは、土御門景衛。前世でベリルの師匠だった男である。

そしてそんな彼が頭を下げているのは、今世での彼の家族。景衛の父、母、妹だ。事前に紹介したい人がいる、とだけ聞いていた家族は景衛の発言に面食らったらしく、ハトが豆鉄砲をくらったような顔をしている。

ベリルは景衛の斜め後ろに慣れない正座で座りながら、次第に自分に集中する視線に

大変居心地の悪い思いを味わっていた。

まず我に返って、厳しい表情で景衛に問いかけたのは父親である。

「あ～……その、景衛。いきなり過ぎて、父さんちょっとよくわかんない。その美人さんはいったい誰かな？　てっきり彼女でも連れてくるのかなって思ってたんだけど、もしかしてそれ飛び越えて嫁？　嫁なの？」

否、我には返っていないようだ。

一家の大黒柱たる威厳は何処へ置いてきたのか、その口調は困惑を隠しきれず厳しい表情とは裏腹にフランク極まりない。そして次にはっと我に返ったのは母親と妹である。

「嫁!?　ま、まあまあ！　どうしましょ玲那！　お母さん姑デビューよ!?　いやだわ、今でもちゃんと家事出来てるか不安なのにお姑さんなんて出来るかしら！　あ、でもそうなるとその前に結婚式よね！　美容院予約しなくっちゃ！　着付けはお料理教室で知り合った田中さんにお願いすればいいかしら！　ああ、どうしましょう！」

「落ち着いてママ！　お兄ちゃん、まだ十八歳になってないから結婚は無理だよ！　でもそうなると婚約者……!?　キャー！　マジで!?　それにしてもとんだ上玉つかまえ

……凄い美人連れてきたもんよね！　我が兄ながらやるときゃやる男だわ！　爺臭いけど！」

事情も詳しく聞かず、勝手に嫁認定されて盛り上がる土御門ファミリーにベリルの困惑は増す。そしてどう説明し、どう収拾をつけるのか。問うように景衛を見ると、口パクで「話をあわせてくれ」と言ってきた。それに不承不承ながらベリルは頷くが、次の発言ですぐにそれを後悔することになる。

景衛は家族を見て、きっぱり言い切った。

「はい。一生かけて愛そうと決めた女性です」

「ぶっふぉ!?」

思わずむせて咳き込むベリルをよそに、景衛は言葉を続けた。

「わけあって、彼女は帰る家が無い。未だ養われている身で図々しい事は分かっています。……ですが、俺は彼女の、ベリルの力になりたい。だからどうか、ベリルを我が家に迎え入れてはくれませんか」

「な、な……！」

口をぱくぱくとさせて景衛を見るベリルだが、ベリルが何かを言う前に眼前から「ぐすっ」というウェットな声が聞こえてきた。父親である。

「そ、そうか……！　お前にそんな大事な人が出来るとは……！　知っての通り父さんも母さんも、駆け落ち同然で結婚した身だ。そんな父さん達が、反対するわけないだろう！　さあ、ベリルさん！　今日からここがあなたの家です！　事情は聞きません。いつか、あなたと景衛が話してくれるまで。……景衛を、よろしくお願いします」

（納得が早すぎるわ馬鹿者!!）

まさかの即ＯＫである。しかも母親も妹も「いい話聞いた……！」とばかりに涙ぐんでおり、ベリルは頭痛がしてきた。そしてついには我慢できなくなり、景衛の腕を掴んで立ち上がる。

「申し訳ありませんが、ちょっと失礼いたしますわ！」

やけくそのように叫んで、ベリルは居間をあとにした。居間から「感極まっちゃったのかしら」などと聞こえたが、今はそれに構っている場合ではない。それより先に、このジジイを問いたださなければ。

そして家の外まで景衛を連れ出すと、ベリルはぎりりっとまなじりを釣り上げて景衛にくってかかった。

「何だお前の家族は、チョロイにも限度があるだろう！　そもそも住むなら住むで、親戚だとかホームステイだとか適当な理由をでっち上げて、魔術で信じ込ませた方がまだま

しだ！」
　しかしいきり立つベリルを前にしても、景衛は特に慌てた様子もなく泰然としている。
「馬鹿タレ。大事な家族に、そんな不誠実な真似できんわい」
「じゃあ婚約者だと嘘をつくのはいいのか!?」
「ああ」
「な、なん……！」
　あっさり肯定され、二の句を告げないベリル。そんな彼女に、景衛は目を細めて笑った。
「まあ、婚約者だなんて勘違いされてしまったのは、ベリルには悪いと思うのだがな。でも、わしゃぁ一言も嘘など言っておりはせんよ」
　すいっと、景衛の腕がベリルに向かってのびてくる。それを避ける事も出来ず呆然としていると、そのまま温かい手のひらに頭を撫でられた。
「お前の事を、愛している。それに嘘など、ありゃあせん」
　心の底から、弟子として、娘のような存在として。……そういった、親愛の情でその

言葉が紡がれているのだと、ベリルには理解できた。しかしそれなら何故、撫でられた場所がひどく熱く感じるのだろう。頬が火照るのだろう。

「は、恥ずかしい事を堂々と……！」

「恥ずかしい？　何処が。わしはち～っとも恥ずかしいなんて思っとりゃせんよ」

苦し紛れに思い切り睨むが、慈愛のこもった視線とぶつかり下を向く羽目になった。

……いったい自分はどうしてしまったのだろうかと、ベリルは頭を掻きむしりたい衝動にかられた。しかしそんな事をしてはあまりにも自分が情けなく惨めなため、ぐっとこらえる。

そんなベリルの内心を知ってか知らずか、景衛はどこか申し訳なさそうな表情で言葉を続けた。

「本当はお前を家族のもとに戻してやれたら一番いいんじゃが、それは嫌なんじゃろ？」

「……今さら、戻れないわ。今世での家族もこれまでの人生も全て捨てて、私はあの闇の王国に染まったのだから」

「だったら、わしがお前の家族になろう」

「家族……？」

「ああ。お前が本当の幸せを見つけるまで、わしがず～っとそばにおる。流石にエンディミオン様は駄目じゃが、ベリルに好きな人が出来たらちゃんと祝福して送り出そ

う。けど、それまではわしが一緒じゃ」

「幸せ？　今さら、そんなもの見つかるわけが……」

生き残った時、心に感じたのは虚ろだった。

最初は、心に歪（ひず）んだ嫉妬から。次に闇に付け込まれ、心の虚無を支配による快楽で満たすうちに、次第にどれが本当の自分か分からなくなった。そして闇が祓われて、中途半端に清められた心に残る気持ちの悪い罪悪感。

認めたくないが、認めよう。ベリルは自分がしてきたことに罪悪感を抱いている。

しかしそれを全て飲み込み、改心した善人面という張りぼてを身にまとって謝罪を口にするなど反吐が出る。長い年月をかけ淀んだ心が、今さら素直になれるわけもないのだ。

生き残ったところで、惨めなだけ。

支配欲という悪夢から覚めた今。何が自分にとって幸福なのかも分からなくなってしまったベリルに、景衛が口にする「幸せになるまで」という言葉は夢物語のように思えた。

死ななかったから、生きているだけ。しかし進んで死ぬほど、悲観してもいない。とにかく何を考えるにも虚しくて、分からなくて、迷っている。それが今のベリルの心境だ。

しかしそんな迷子のベリルに、昔とは違って、昔と同じ手は差し出される。
「一緒にいよう」と。
「お前の罪は、わしも一緒に背負って償ってゆく。でもそれはそれとして、せっかくの二度目の人生じゃ。楽しむところは、楽しまないとそんじゃぞ！」
そう言って笑った景衛の若々しい笑顔に、一瞬しわくちゃの爺さんが重なって見えた。
「だから、一緒に幸せになろう！」
「ばっ！　言い方!!」
「？　わし、何か変な事を言ったか？」
「ぐ……！」

言えるわけがない。
まるでプロポーズみたいだ、なんて思ってしまった事なんて。

（あああ！　何故私がこんなジジイに!!）
今が夕方で良かった。火照った頬について聞かれたら、太陽に照らされているだけだと言えるから。

ベリルはとても処理しきれない訳の分からない感情に思考回路がショートしかけるが、このままでは何か負けた気分になる。だからせめて少しでもあがこうと、やけくそ気味に叫んだ。

「やれるものなら、責任取って幸せにしてみろ！　この馬鹿!!」

この後。自分の台詞がプロポーズの返事みたいだと気づき、ベリルは一人悶える事となる。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

前世からの長い長い、戦いが終わった。わしもずいぶんと遠いところまで来たもんじゃ。

しかし今のわしは最高に幸せなのじゃろう。エンディミオン様に再びお仕えする事が出来て、かつて救えなかった弟子とまた手を取り合う事が出来た。これを幸せと言わずして、なんというのか。

この先も、もしかしたら大きな苦難が押し寄せてくるかもしれん。しかしわしは、それに負ける気など微塵もせんのだ。

何があろうと、立ち向かってゆこう。大事な者たちと手を取り合いながら、一緒に歩んでいこう。

白い月の光が見守る、この青い碧い美しい星で。

「と、いうわけで！　本格的に自分を鍛え直すことにしましたですじゃ！　この若い体には、まだまだ伸びしろがありますからな！　そこで縁起を担ぐ意味もかねて、こたび勇ましく戦われた五人のセーラー戦士様方に倣ってやはりわしもこの伝統の戦装束をこすちゅーむにしようかと！」

「やめてくれじいや！」

「歳と性別を考えろクソジジイ!!」

　これからも頑張るぞ！

　そう思って気持ちを新たにわしサイズに作ったセーラー服を披露したら、主にも弟子にも物凄く拒絶された。

　何故じゃー！

《美少女戦士セーラームーン　ＪＩＩＹＡ　完!!》